

501
212

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



湖水の上

南部修太郎著

50
212

501-22



南部修太郎著

湖
水
の
上

千九百二十一年十月

新潮社出版

大正
10 11.15
内交



目	一	二	三	四
次	父	上	に	獻
	ぐ			



目次

弱き戀.....一

Vengeance 五

一兵卒と銃..... 三

星影..... 七

死神..... 三三

接吻..... 四六

schöne Zeit

途上..... 三三

湖水の上..... 三五

河村君の家..... 一五

争ひの果て..... 三三

跋

湖水の上

南部修太郎著

装
幀

著
者



戀

八年九月作



戀

僕が初めて瀧子に會つたのは岡山の高等學校にゐた時分のこと、その時僕は丁度二十三でした。會つたと云つても、全く或る單純な機會が僕を瀧子まで導いてくれたので、とも角もさうした若い女性に近づくやうな機會を作る力も強みも僕は持つてゐなかつたのです。實際、僕のやうな世間知らずの、臆病な、引込み思案な、そして何事にもぐづぐづこだはり勝ちな人間に、押し切つて戀などが出来る筈はないのです。ただ女の前に出るのさへ恐ろしく、恥かしく、變におどおどする性なのですから……。その意味で、僕は自分をこんなに弱い、意氣地なしのお坊ちゃんに育て上げてしまつた兩親を恨まずにはゐられませんが、僕の持つ若さと云ふものがその爲にどんなに乾干びた、涸淡なものになつてしまつたでせう。で、その年に瀧子を知るまで僕は戀と云ふのは劣なこと、若い女性と云ふものに——全く一人の妹以外に單純な知合さへなかつたのです。いや、知り合ふ力がなかつたのです。それも女とか戀とかに冷淡に超越してゐる、若しくは學問にでも専心してさうした對象を頭に置くことを抑制する——そんな青年の多くは或る意味の偽善者のやうな氣も

しますが——さうとでも云ふのならまた別問題でせう。然し、僕は始終さうした對象が頭の中にこびりついてゐて、時には浪漫的な憧憬ロマンティックを持ちながら、時には性的な欲求を持ちながら、寂しがつたり悶えたりしてゐたのです。そして、精神的にはとも角として、餘り健康な體質ではなかつたにも拘らず、可成り強い性的の悩みを絶えず肉體に感じてゐることを自分ながら恥ぢてゐました。で、中學の時分から或る不自然な、密かな慰樂をすることさへ知つてゐました。性欲と云ふことに精神的には幼稚で臆病でありながら、肉體的には早熟で大膽——無論、自分の世界だけで——だつたこと、それがその頃の僕でした。

で、僕にとつて女と云ふものは全く不思議な、それでゐて美しい蠱惑的な、解き難い謎のやうなものでした。近くにゐて遠くにゐるやうな、掴まりさうで掴まへられないやうな一つの幻でした。僕はその謎を解き、その幻の正體を捉へようとしてどんなに密かにやきもきしてゐたか知れません。然し、僕はその度ごとに失望しました。そして、自分にはその力はない。自分にはその謎を解き、幻の正體を捉へ得るやうな機會は到底今は與へられ

ない。そんな寂しい諦めも持ちました。が、若々しい青年達の寄り合つた高等學校生活では、僕は多くの友達から戀物語を聞き、性欲の未知の世界を説かれ、發はなかれた女性の姿に就いて色々の事を教へられました。彼等の眼はその時得意さに輝いてゐました。彼等の聲はその時誇に顫へてゐました。恐らく其處には虚偽もあつたのでせう、また誇張もあつたに違ひありません。然し、私はそれを疑ふことすら知りませんでした。すべてをお伽話を聞く無邪氣な子供のやうに信じました。そして、其處に踏み込み得ない自分の弱さに一そう悶えあがくばかりでした。

「多くの友達々はああして楽しく戀をし合ひ、女の包む不可思議の扉を開いて笑つてゐる。然し、自分にはすべてそれは他の世界だ、許されない世界だ。かうして寂しく單調に自分の若さは過ぎて行くのかも知れない……」と、時々僕は涙ぐましくさへなつて考へました。そして、醜い一人の自己に歸りました、すべては僕が弱かつたからです、臆病だつたからです。が、僕はそれ以上強くなることも、大膽になることも到底出来ない男でした。で、

心寂しくなると、僕は京都の家うちにゐる妹の處へ手紙を出したりして、せめても妹から、單純で、無邪氣で、これも僕に似てお嬢様育ちの妹から、若い女性の香を嗅がうとし、時々戀人のやうに想像しようと思ひました。が、さうした子供らしい戯れが、妹から送られる世間並の骨肉の愛と云ふものが、僕の寂しさや悶えを心底から慰めてくれよう筈はありません。然し、僕にはそれ以上のものを求める力はなかつたのです。

確か高等學校へ這入つた翌年の暑中休暇でした。僕は學期試験が済むと、直ぐに京都の自分の家に歸りました。妹はその時十八で、或る府立女學校に通つてゐたのですが、僕の眼には何時も歸つてくる度に、妹が若い女らしく生き生きと艶やかに成熟して行くのを、その時もしみじみ感じました。純に素直に育てられてゐる妹は決して醜い女ではありませんでした。僕は妹のナイイヴな處女らしさを持つたその姿の上に、架空の戀人の姿を描いてみたりすることもありました。そして、其處から或る楽しさと甘い満足とを求めました。けれども、さうした感情の底には空虚があります、隙間があります。僕は時々追ひ難いも

のを追ひ求める寂しさと、心の痛みとを強く意識せずにはゐられませんでしたが、その夏でした。とうとう一つの偶然が僕に瀧子と會せてくれる或る動機を與へたのです。

僕の家は清水寺に近い西大谷の靜かな町にありました。そして、僕の家うちの丁度裏手に或る銀行に勤めてゐる水野と云ふ中年の夫婦が住んでゐました。永年近所同士と云ふ因縁で僕の兩親と水野夫婦とは可成り親しく往き來してゐました。水野夫婦は親切な、世話好きな、好人物の一對で、もうその頃は僕の兩親も彼等に對しては相當に打ち解け合つて、親身の相談さへする間柄でした。僕は水野の細君を「小母さん」と呼んでゐましたが、キサクな性まぢで、ガラガラ者で、子供がなかつただけに僕や妹を非常に可愛がつてくれてゐたのです。

「あてな、せんどから芳雄さんに好いお嫁さんを、貞子さんに好いお婿さんを世話したると、かう思うてまんねぜ。ほんまどすぜ、てんごやおへんえ。あんた方笑うてやけど……」

と、水野の細君は時々こんな事を云つて、私達を苦笑させました。

丁度その夏、僕の歸校の近づいた或る日のことでした。何時ものやうな母達との茶話の間に、水野の細君が不意に思ひ出したやうに云ひました。

「あのな芳雄さん、とうからお話しせんならんと思うて忘れてましたんのやけど、あのこの春からあての妹の家が岡山に住んだりますわ。苗字はな、中島云ひますよつて。今度お歸りやつたらどうぞ訪うとくんははれ……」と、水野の細君は云つて、中島の家の人は一昨年逝くなつたこと、三十九になる自分の妹の可哀想なこと、然し、子供が大勢ゐて賑かな家であることを京都詞で繰り返し繰り返し云つて、僕自身も寂しいだらうから遊びに行つてくれると、全く親切氣からしみじみと頼むのでした。が、根が僕は人の家を訪ねるのが嫌ひな上に、まるで見知らぬ家となると一そう億劫に考へる性でしたので、折角さう勧められてみても、その家を訪ねることに大した興味は持てませんでした。何か迷惑なことでもあるやうな氣もしました。然し、水野の細君は勧めたくてならぬらしく熱心に勸

めた上に、いよいよ歸校の時が来た時に僕に京都土産の事づけ物までして、どうしても訪ねずにはゐられないやうなきっかけを拵へてしまつたのです。僕は可成りそれに弱らされました。が、そのきっかけが僕にとつて、譬へ東の間のものであつたにせよ、一つの幸福を與へられるものにならうとは夢にも知らないことでした。

一人岡山に歸つて下宿の部屋に落ち著いた時、一時家庭生活や妹に依つて慰められてゐた胸の寂しさは再び強く蘇つて來ました。そして、何物かを求めようとして求め得られない寂しさと、その寂しさをそつと隠れて充たさうとする陰の自己に對する厭惡の心が劇しく胸を責めました。そして、また一方では見知らぬ家を初めて訪ねる子供らしい氣遣れから、中島の家へ行くことを逡巡してゐました。そんな些細なことにまで僕は優柔不斷だつたのです。が、事づけ物に對する責任感はどうとう僕の氣遣れを征服して、丁度九月の末、もう残暑も過ぎてそろそろ秋風の立ち初める或る土曜日の午後、中島の家を訪ねる決心を得させました。考へてみれば、僕の徒らな逡巡は自分に近づかう近づかうとしてゐる

幸福の歩みを、自ら遮つてゐたやうなものでした。

後樂園の裏手にあつた中島の家は直ぐに見當りました。建仁寺垣を巡らした、玄關近くに檜葉の植込のあるささやかな家でした。桃と白のコスモスがその間に咲き残つてゐるのが、僕の心に何となく懐しい氣持を起させました。賑かな家と聞いたのに妙に静かでした。僕は音なほうとして何度ためらつたか知れませんが、「御免下さい……」と、息づまるやうな聲で詞を掛けるのがやつとでした。

「御免下さい……」と、再び呼んでみた時、僕の胸は變にどきついてゐました。そして、見知らぬ人に會はなければならぬ氣詰りと氣拙さとは會はない先から心を不愉快にしました。が、

「はい……」と、奥の方からそれに答へたのは思掛もない若い女の澄んだ聲でした。僕はドキツとして我知らず顔を赧らめてしまひました。何だか恐ろしいやうな懐しいやうな何物かが自分に迫つて來たやうな、くすぐつたい變な胸騒ぎがして來ました。

やがて薄暗い玄關の障子の影に上半身を見せたのは、豫想した通り僕がそれまでに殆ど面と向つて話し合つた經驗さへない若い女性でした。僕はまたドキツとしました。そして或る氣ずくみを感じながらも細目な格子の外からちらつと視線を投げた時、僕の網膜に全體の焦點を其處に集めたやうに鋭く刻み込まれたのは、張りのある、キレの長い、黒み勝ちな、何處となく理智的な魅力のある眼でした。好い眼だとその咄嗟に僕は感じました。それが瀧子の眼だつたのです。全くその瞬間、瀧子の眼が僕の胸に與へた一つの衝撃シヨック、それが今まで僕にとつて全く未知の世界だつた神祕の扉を開いてくれた鍵だつたのです。

「僕、松川です……」と、硬張こはばつた聲で云ひました。その時僕の眼は、心の中で「意氣地なしめ……」と、叱りつけてゐるにも拘らず、變にきよときよと動きました。抵抗しようとすればする程、血が顔に昇つて來ました。

「あら……」と、瀧子は蕪葉らしく呟いて、直ぐに次の間へ駆け込んでしまひました。僕は一時に氣の緩んだやうな、また何となく物足りなくもあるやうな氣持で、空虚な眼の前

を見詰めました。と同時に、僕の胸には偶然中島の家を訪ねたことに對する歡びが湧かすにはあませんでした。譯もなく求めあぐんでゐる何物かがその家の中に自分を待つてゐてくれたやうな気がしたのです。

「まあ松川さんでいらつしやいますか。ようこそ。姉から知らせがありましたので、この間から今日か明日かと思つてお待ちしてゐたんでございますよ……」

其處へ滑かな東京辯でかう云ひながら出て來たのは水野の細君の妹、瀧子の母に相違ありませんでした。年にしては老けて見える、何處か理智の勝つたらしい、蒼味を持つた細面の婦人でした。一體の感じは冷たいけれど、世帯慣れのした愛想の好い人柄でしたので僕は一眼で瀧子に感じたのとは違つた意味の親しさを感じました。瀧子はその母の影からその眼で偷むやうに私を見てゐました。それにひよいと氣附いた時、僕は體ぢゆうを蜘蛛の糸でも巻かれて行くやうな、何となく異様な息苦しさを感じました。そして、瀧子の母に詞を返すのさへ容易ではありませんでした。

が、とに角僕はその土曜日の半日中島の家で、何か或る幸福に遠巻きに巻かれてゐるやうな心持で時を過しました。瀧子は母と並んで、時々果物や紅茶を運ぶために座を立ちはしましたが、割に落ち著きのある表情を見せて僕と筋向ひに坐つてゐました。そして、母の輕快な話聲の間に折々首と胸を襟元の處でくの字なりに曲げて軽く笑ひながら母の詞の補ひ手となつてゐました。瀧子の母は生來話の下手な口の重い、而も、その時は一そう堅くなつてしまつてゐる僕を前にして、快活に流れるやうに話し続けました。その春まで家が東京の牛込に住んでゐて夫が鐵道の役人であつたこと、岡山が夫の郷里であること、女と子供ばかりで生活の心細いこと、瀧子が今年十九で四月に東京のM女學校を卒業したこと、京都の姉の噂さ、五年前に京都に住んでゐた頃の追憶話——さうした事柄を次から次へと、殆ど僕が相槌を打つ暇のない程饒舌り立てました。而も、その間々には僕に色々な質問を浴びせ掛けるのです。僕は少しへどもどして時々ハツと顔を赧くするやうな見當違ひの返答さへしました。然し、彼女は随分お饒舌りだとは思へたにしても、決して感じ

の悪い話手ではありませんでした。が、打ち明けて云へば、僕の意識、或は興味、或は好奇心は瀧子の上に集中されてゐたのです。譬へ其處に彼女の母がゐたにしても、とに角一つの部屋に若い女と對座して話し合ふと云ふことは、今までの僕にない珍しい經驗でしたから……。

瀧子は紺地に渦巻模様のある縮みの單衣を着て、麻の葉の帯を締めてゐました。小作りこづくりの女でしたが十九と云ふ年にしては割にすべての物ごしがませて、老けて見えました。そして、僕よりはよつぽど落ち著いてハキハキしてゐました。父を喪ひ、二人の弟と三人の妹の姉であると云ふ自覺がさうさせてゐたのかも知れません。で、彼女が自分の側に坐つてゐると云ふ意識は初め僕の心持、僕の動作を強く壓迫して、息詰るやうな感じを與へましたが、瀧子の母の輕快な應酬に幾らかそれを和げられると同時に、彼女自身の思ひの外打ち解けた様子は、僕の氣分をだんだん落ち著けて行きました。何時か僕は彼女に直接詞を掛けるやうな大膽さ——さうです、その時の僕には全くさう感じられました——さへ持

つやうになりました。例へば「琴をお習ひですか……」と云ふやうな單純な問を……。すると彼女は僕の短い問の詞よりも何倍か長い詞で答へ返すのでした。

「口が大きいな……」と、語り續けてゐる内にふと僕は不思議なものでも見附けたやうに心の中で呟きました。鼻も高いとは云へないにしても、好い感じの鼻です。が、その下の受け口の赤い厚い唇、それは彼女の細面ほのおもての瓜實顔には少し不調和な程の口を形作つてゐました。而も、その大きさは少し黄色味を持つた揃つた齒並をニツと現す時、一そう誇張されて見えました。恐らく彼女もその缺點に氣附いてゐるのでせう。時々何かの拍子に大きく笑つてはつと唇を引き締める、袖で覆ふ、俯向く、さうした女らしい細心な技巧が見るともなく眼に著くのです。けれども、その唇は澄んだ理智的な眼の冷かな魅力とは反對に何となく温みのある柔かな魅力を僕の眼に感じさせました。そして、或る數秒間、瀧子の母の口から洩れたさげ言に高らかな笑ひ聲が三人の間に續いた後、彼女が眼の前にあつた梨の一切れを取つてひよいとその赤い唇に當てた時、或る空想が僕の頭の中に「キス」と

云ふ詞を稻妻のやうに走らせました。と、僕は何云ふとなくその詞にヒヤリとしました。我知らず二人の視線を避けるやうに俯向いてしまひました。

夕方近くなつた時、何處かへ遊びに行つたらしい子供達が急にぞろ／＼と歸つて來ました。

「これは高等學校にいらつしやる松川のお兄様にいさまですよ……」と、瀧子の母が彼等に紹介しました。僕にはその時全く事もなげに洩らされたらしい「お兄様」と云ふ詞にこそばいやうな耳響きを感じました。

「みんなやんちゃで、悪戯いたづらつ兒でございますのよ……」と、それに續けて瀧子がほほ笑みながら云ひました。

僕は子供や動物が大變好きでした。そして、彼等をあやなすことが自分ながら不思議な程巧いのでした。幼い弟妹達きょうまいたちがゐなかつたから必然にさうなつたのかも知れませんが、全く大人、殊に女性に對しては殆ど働き得ない頭や技巧が彼等に對する時、可笑しい程樂々と

欠

欠

た山々には頼りないうすれ日の影が靜に差してゐました。僕は弟妹達の手を引いて野道を歩きながら、瀧子の姿を見る度に「今日だ、今日だ……」と、心に呼び續けてゐました。が、弟妹達の存在、殊に十六になる妹の光子のさかしげな眼は僕を度毎に氣遅れさせました。そして、絶えず何か或る罪惡を犯さうとでもしてゐるやうな不安を感じさせました。吉備津神社の境内へ來た時、弟妹達は急にはしやぎ出して繪馬堂の方へ駆け込んで行きました。僕と瀧子は彼等の跡に取り残されてしまいました。——今だ……と、僕は思ひました。と、僕の總身は突然電流を掛けられたやうに硬張つて、開かうとする唇だけがわなわな顫へ出しました。僕は意氣地なさと、不安と臆病とを抑へようとして戦ひを續けたのです。見るともなく見ると、瀧子の顔もその僕の様子を見て取つたのか心持蒼白んで、双の眼が恐怖に打たれたやうに落ち著きなく光つてゐます。僕はまた氣遅れしてしまいました。二人は詞もなく俯向いて立ちすくんでゐました。その途端に、

「お兄さん、お姉さん、いらつしやい……」と、遠くから弟妹達のせき立てる聲が聞えて

来ました。

「おおい……」と、僕は自分の心の焦燥を胡麻化すやうに故意と聲高に答へ返しました。氣拙く顔を見合せた時、二人はもう數歩歩き出してゐました。そして、その咄嗟に或る期待を裏切られたやうな、瀧子の空虚な表情を認めました。僕は自分の弱い心が、苛立たくしく涙ぐましくなつて来ました。

「女なんて男が大膽にアクテ、ヴにやりやあ……」と云つた或る友達の詞が、その時ふと僕の頭を掠めました。然し、僕の根本的に弱い心をどうすることが出来ませうか。その日もとうとう空しく過ぎてしまつたのです。

その晩一人自分の下宿へ歸つて来た時、僕はひしひしと胸に責め上げてくる刺しい寂寥と焦燥の心をもてあぐみました。而も、その心は瀧子を知らなかつた前のどんな寂寥、どんな焦燥の心よりもつと堪へ難いものでした。僕は興奮した擧句、瀧子の存在を呪はしいものにさへ感じました。そして、一人になると心持の上でどんなに強くでもなり得る僕

は、瀧子の上に悪魔として働く自分の姿を涯なく空想しました。僕の神経は鋭くなり、牙えきるばかりでした。が、やがて僕は醜い淵に一人引き摺られて行く自分自身を見出しました。けれども、その自分を引き止める力はなかつたのです。僕は弱い男です、臆病な男です。僕はさうした自分の性格を悲しむより外はありませんでした。

僕と瀧子とはかうして時々會つてはゐながら、それ以上の深みへ這入つて行くことは出来ませんでした。單純な知合と云ふに過ぎない表面的な交渉だけが續いて行きます。而も瀧子に會ふ度に僕は彼女自身も僕に對してより深い厚意を持つてゐて、それを現さうとして處女らしくためらつてゐるのがまささまさと感じられました。二人はもう可成り外側では打ち解け合つてゐながら、それが露に戀と云ふ感情に觸れようとする時、忽ち弱くなつて尻込みしてしまふのです。他々しい顔をしてしまふのです。そして、その臆病さを意識する寂しさと、もどかしさを胡麻化さうとして、中心を離れた圓盤の周圍を二人はぐるぐる廻りながら差し障りのない詞や淡い感情の遊戯を試みてゐるだけでした。——自分は男だ

自分からそのこぼれはりの幕を破つてしまはなければ……と、内では考へながら、いざ外へ出ようとするやつぱり駄目でした。どうしても崖の縁から恐ろしくなつて後戻りしてしまふのです。

——自分にはやつぱり戀をする資格はない。若い女性が眼の前に興へられても、自分には彼女の胸の中に飛び込んで行く勇氣も力もない。何と云ふ弱い自分だらう、何と云ふ優柔不斷な自分だらう……と、とうとう僕は自分自身に失望してしまひました。

僕はかうしてこぼれを破りきれずに瀧子に會つて行くのがだんだんに息苦しくなつて來ました。そればかりではなく、さり氣ない平氣な顔をとつくりながら、彼女の姿に對して漸く不純な空想を抱いたり醜い誘惑を感じたりするやうになつて來た自分が、恐ろしく淺ましく思はれて來ました。さうなると、今まで外に向つて働いてゐた臆病な小心な僕の心は、内の自分に對して變にこぼれ掛けて來ました。そしてさうした息苦しさ、失望、自責の心から、より強く瀧子に惹き附けられてはゐながら、何時となく彼女から離れ

欠

欠

夜になつた時、茶の間に水野の細君の聲をひよいと聞きつけました。と、僕は何となく胸の鼓動が高まつて行くやうな気がしました。僕は或る氣遅れを密かに感じながらも、引き寄せられるやうに自分の部屋を出て行きました。

「あんたが遊びに来やはるよつて豪う氣強うなつた云うて、妹が喜んだりますわ。ほんまに男氣がなうては心細いもんだすさかいな……」僕を見ると水野の細君はかう云つて、満足さうな微笑を浮べました。が、僕は彼女の顔を眞面に見るのが變に面映ゆいやうな気がしました。そして、その世慣れきつた鋭い眼差に、腹の底を見透かされるやうな心持がしてなりませんでした。

「賑かなお家ですね……」

「ええあんた、小こいのが揃うてなあ……」

僕は暫く彼女と向き合つてゐたのですが、どうにも氣持が落ち著かないのです。而も、心の中では彼女の心から洩れてくる或る詞を熱心に期待してゐました。彼女は何時ものや

うに饒舌に快活に話し続けました。が、その話題が多く中島の家を中心にしてゐたにも拘らず、彼女はまるで其處に瀧子のゐるのを忘れてゐるやうにさへ見えしました。僕はもどかしくなりました。そして、何となく物足りなく心寂しくなりました。引込み思案な、臆病者の僕が瀧子に就いて一言も云へなかつたのは云ふまでもありません。

或る希望を繋いでゐた日はかうして事もなく過ぎ去りました。そして、充たされない心を抱いたまま僕は再び岡山へ歸りました。云ふまでもなく、——今度は今度は……と云ふ決心を持ちながら歸つて來たのです。然し、その決心は瀧子を前にした時、忽ち裏切られてしまひました。一步も進み得ない自分、變化のない彼女との交渉、僕はだんだんに其處から惹き起されてくる焦燥や苦悶に疲れて來ました。そして、瀧子に對する自分の力のすべてに失望しきつた僕は、彼女に感じてゐる密かな愛や熱情が何となく冷めて行くやうな寂しさを意識しながら、それをどうすることも出来なかつたのです。僕の足は中島の家から次第に遠ざかつて行きました。僕の心は諦めの中に沈んで行きました。すべてを弱々し

くすねて孤獨の自己に住まはうとする僕——それが次に來る僕でした。

「おい松川、君はこの頃どうかしとりやあせんか。顔色が悪いぞ……」と、或る時校庭で級友の武田がぼんやり考へてゐる僕の肩を叩きながら詞を掛けました。

「なに、どうもしとりやあせん……」

「然し、學校へもあんまり出んしな。何か心配事があるのか。厭やに沈んでるぢやないか……」と、武田は疑惑の眼を光らせました。

「さう見えるかなあ……」

「見えるぞ……」と、武田はまた直ぐにおつかぶせて云ひました。

高等學校でも僕はあんまり友達と親しく交際し合ふ方ではなかつたのです。僕は彼等に對しても臆病で意氣地なでした。で、心から打ち解けると云つたやうな友達は持てませんでした。無口で、不得要領で、決斷力のない男——彼等にはさう思はれてゐました。「松川つてえ奴は何だか譯の分らん男だ……」と、彼等は云つて、向うからも深く親しまうと

はしませんでした。で、僅かな友達と云へば、何れも極く淡い表面的な、例へば尺八を吹き合ふと云つたやうな單純な趣味の友達ぐらゐに過ぎなかつたのです。で、多くの場合僕は孤獨でした。

「神經衰弱かも知れんぞ……」

「さうかとも思ふとる……」と、武田に何氣なく答へた時、傍にゐた悪口屋の近藤が急にニヤニヤ笑ひ出しました。そして、頓狂に叫び上げました。

「おい、中島氏の消息は其後どうした……」

「ふむ、どうもせんさ……」と、僕はさり氣なく答へましたが、急に不愉快な氣持が胸に込み上げて來ました。僕と瀧子との交渉はとうとう或る友達に發見されて、「松川も隅に置けなくなつたぞ……」と云つたやうな冷やかしを何度か受けてゐたのでした。

「色男、怪しいぞ……」と、不意に誰かが呟くと、みんなは一齊に僕に向つて笑ひ掛けました。僕は現在の自分の心持と彼等の嘲笑とを思ひ合せて、涙ぐましい氣持になりました。

そして、ふと前にさうした嘲笑を受けた時、赤面しながらも擦られるやうな或る歡びを密かに感じてゐた幸福な自分を寂しく思ひ浮べました。

が、時として心寂しさが思ひ餘ると、行き處のない僕はやつぱり中島の家を訪ねるより外はありませんでした。そして、その寂しさを、苦しみを、焦燥を笑ひの影に包んで、瀧子やその弟妹達きょうだいたちの中に自分を交へて、子供らしい戯れと無邪氣な楽しみに淡い満足を求めて歸りました。僕はもうそれ以上のものを瀧子に求めようとする心を却しりぞけました。譬へ求めても得られないものであることを僕は諦めるより外はなかつたのです。また、よし求めてそれ以上のものが得られたにしても、それが幸福になるか不幸になるかは僕には想像し得られない境地でした。

——何を苦しんで、何をあせつて自分は戀の深みへ自分を投げ込まうとしたのだらう。これで好いのだ、これで力に相當してゐるのだ、そしてこれで幸福なのだ……と、重荷を降したやうな氣持で、或る時僕はしみじみと考へました。

春の休暇になつた時、僕はまた京都の家へ歸りました。その時の僕の心は可成り落ち著いてゐました。水野の細君から或る詞を期待しようとも思つてゐませんでした。譬へ彼女が自分に瀧子を世話するなど云ふ意志があらうがあるまいが、もうそんな事はどうでも好いやうな氣持がしてゐたのです。そして、瀧子の處へ子供らしい、純な手紙を送つたりすることに少しの不満も感じなくなりました。

が、歸つた日の翌日、母が僕の居間へ這入つて來て、突然僕に向つてこんな事を訊ねました。

「ねえ芳雄、岡山の中島さんのお宅に瀧子つて云ふ娘さんがおありかい……」

僕は恐らく瀧子の名を知りもしまいと思つてゐた母からいきなりこんな事を云ひ出されたので、思はずはつとして、顔を赧らめてしまひました。僕の平靜な心に丁度水面に小石を落したやうな動搖が起らずにはゐませんでした。僕は驚きと恥かしさと疑惑の入り交つたやうな、變な氣持になりました。

「ええ、ゐますよ。それがどうしたのですか……」と、僕は努めて落ち著きを裝つてゐました。

「いえ何でもないんだけど、ただ聞いてみたの。綺麗な娘さんかい……」と、母は尙も冷靜な聲で、僕の心持を困惑させずには措かないやうな第二の問を續けました。

「ふむ……」と、僕は口籠つてしまひました。母の眼には僕の落ち著かない様子を訝るやうな光が見えます。僕は何となくその眼に凝視されてゐるのが苦しくなりました。そして何か恐ろしいものでも待ち受けてゐるやうな胸騒ぎがするのです。

「何でも大變好い娘さんだつてね……」

「そんな事を聞いてどうなさるんです……」

僕はとうとう堪へきれなくなつて、半分は心の底の動搖を胡麻化さうとして、聲をつくらひながら訊ね返しました。そして、ふいと顔を反けてしまひました。

「なにね、外ぢやないんだけど、水野の奥さんがその方をこの近所の方に世話しようとし

てらつしやるからさ……」

「誰にです……」と、僕はギクリとして、思はず聞き耳を立てました。

「やつぱり銀行の方だつて、それでちよいと聞いてみたのよ……」と、母は事もなげに答へました。

「あつ……」と、我知らず口を飛び出ようとした驚きの聲を僕はぐつと堪へました。けれども、體ぢゆうに一時に襲ひ掛かつた劇しい感動を押し包むことは出来ませんでした。僕はきつとその瞬間顔色を變へてゐたでせう。唇も顫へてゐたに違ひありません。とに角、僕は鳩尾をぐんと突き上げられたやうな衝撃シヨックを受けて、暫く母の顔をぢつと見詰めてゐました。その内に眼に涙が染んで來たのが自分でもよく分りました。私はそのまま口を噤んで俯向いてしまひました。

僕のをかした様子に氣附いたらしい母は、やがて探るやうに疑惑の眼を僕に向けましたが、そのまま詞もなく部屋を立ち去つてしまひました。

僕はその時何故さう自分が驚いたかは分りません。が、僕はやつぱり瀧子を戀してゐたのです。そして、自分の胸に抱かうとしてゐたのです。諦め、不満、冷却——それはすべて僕の心の表面を欺くやうに動いた一時の迷ひだつたのでせう。少くともその時の驚きは眞剣なものでした。體ぢゆうをぎゆつと引き絞つて出たやうな驚きでした。而も、その驚きは瀧子に對する愛を、情熱を一時に僕の全身に蘇よみがへらせました。瀧子を見知らぬ男に奪はれてしまふこと——それは考へても恐ろしい、寂しい、堪へられないことでした。僕は苛々しました。そして、その瞬間程今までの自分の瀧子に對する徒らな遲疑と逡巡とを呪つたことはありませんでした。

「もうこれが最後だ。今度こそは……」と、僕は水野の細君の處置に或る恨みを感じながら、興奮して叫びました。そして、見知らぬ男の手に引かれて行かうとする瀧子を取り返さうと決心しました。

が、その決心も興奮もやつぱり弱い心の一時の空しい奔騰に過ぎませんでした。そして、

冷かな現實に對すると、それは忽ち影を潜めて無爲無能の自己に歸つてしまひました。僕は如何にその自己を鞭打つても、母にも、水野の細君にも、瀧子の母にも、その決心に就いて一語も打ち明けることが出来なかつたのです。恐ろしいのでせうか、恥かしいのでせうか、それとも苦しいのでせうか。僕は思ひ詰めてもう一步と云ふ處まで近づきながら尻込みしてしまふのでした。そして、ただ徒に一人密かに惱み、悲しみ、悶え、あせるばかりでした。やがて、その跡には諦めが、屈従が、そして沈黙が來るのです。僕は弱さ、意氣地なさ、臆病さその物のやうに生れついた自分の性格を呪ふより外はありませんでした。

が、その時はとうとう來ました。瀧子を見知らぬ男に奪はれてしまふ時が遂に來ました。けれども、それをさへ、運命の影に——弱者の最後の避難所に身を寄せて、寂しく思ひ諦めようとしてゐる自分だつたのです。その僕が、情無い人間である僕が瀧子から思ひ設けない最後の手紙を受け取つた時、その手紙を前にして空虚うつろなものを見るやうな眼附をして

つくねんと坐つてゐる一人の男の姿にどんなに堪らない憐れさと、みじめさを感じたでせうか。

芳雄様——

私は明後日いよいよ京都へ立つことになりました。もうどんな事もすつかり御承知のことと存じます。そのすつかり御承知なのがほんたうは悲しいのですけれど、私は何もかも諦めてをりますの。かうならなければならぬのも、私の生れ落ちる時からの運命だと思つてをりますから……。けれども、今見知らぬ男に嫁いで行かなければならない私、私の懐しい處女時代の最後の日の前に、私はあなた様に最後の、そして一番ほんたうのお手紙を差し上げたうございます。お許し下さいませうね。私の眞心からのお願ひなのでございますから……。

私ももう何もかも存じてをります。私も弱いのでございました、臆病なのでございま

た。そして、きつともう一生忘れることの出来ない日だと思ひますけれど、昨年の九月の二十六日に初めてあなた様にお眼に掛かつてから今日まで、弱いために臆病なためにとうとう心の底をお打ち明けすることが出来ないで、こんな事になつてしまつたのでございませう。ほんたうに悲しうございませう。覚えてゐて下さいましたか、あの吉備津神社のことを――もうあの時からあなた様のお心持はすっかり分つてをりました。かうして筆を走らせてをりましても、あの時のお顔がはつきり思ひ浮んでまゐります。私もおんなじ思ひでございましたもの、光子達に呼ばれました時、私は心から口惜しうございました。

けれども、その時から今日までほんたうに私は何をしてをりましたのでせう。夢なのではないのでせうか。きつと夢でございませう。お打ち明け致しますと、私も今日か明日かと思ひまどつてゐましたの。それでゐて一言も、ただの一言もなんにも申し上げられなかつたのでございます。そして、一人になると唇を噛んで悶えてをりました。その私をあなた様は分つてゐて下さいましたか知ら……。それですのに、今年になつてからあなた様に

お目に掛かる日が數少なくなり、何故前のやうに何度も何度もお訪ね下さらなくなつたのでせう。私は寂しさと悲しさに胸が一杯になつて、泣いてをりました、お恨みしてをりました。不束ふつがな自分だとは思ひながら、身も心もあなた様に捧げるつもりでございましたのに……。

その私が今度の話を初めて聞きました時、私の悲しさと驚きとはどんなでございましたらう。見知らぬ人に――それは考へても恐ろしい厭やなことでもございました。氣が進まなのまま、私は迷ひました、苦しみました、悶えました。けれども、けれども芳雄様、ほんたうにお許し下さいませう。私はやつぱり日本の家庭に育てられた弱い女でございました。意志の獨立も、感情の自由も束縛されてしまつてゐる女でございました。そして、盲目に愛のない結婚に従はなければならぬ身の上でございました。無理解な冷たい親類の人達の意のままに支配されて行く自分、私にはそれがどんなに悲しいものに見えましたでせう。けれども、それにもまして悲しいのはあなた様を頼みにして、私達のことを考へてゐてく

れました母の意志が、その人達に遮られてしまったこととさせていただきます。私は父なき身の悲しさをしみじみ覚えしました。

芳雄様——

お許し下さいまし、ほんたうにお許し下さいまし。私は屠所へ牽かれる羊のやうに牽かれてまわります。私は自分の前に幸福が、光が、楽しさが待つてゐようとは思ひません。また待つてゐてくれよと願ふ心もございません。私は何時までも何時までも身も心もすべてをあなた様に堅く捧げてゐるのでございますから……。お忘れ下さいますな、永く永くこの不幸な憐れな私を……。

初めての、そして永久に最後の熱いキスをこの小さな花瓣に籠めてお送り申し上げます。

五月十九日夜

何時までもあなたの 瀧子より。

この最後の瀧子の手紙を受けてから三年経ちました。そして、その間に僕と瀧子とは各々異なる運命の道を辿つてゐたのでした。

瀧子と別れた翌年、丁度東京帝國大學の理科に在學中、僕は京都にゐる父の急死に會ひました。それと同時に一家を引き纏めて東京郊外の大森に住みました。明るる年妹の貞子も結婚して博多に行きました。僕はかうした境遇の變化の後、今は母と二人で靜に生活してゐるのです。が、その三年間に僕自身にも内的の變化がありました。僕は二人の女と戀をしました。童貞も破つてしまひました。色々な世間的の經驗を積んだのは云ふまでもありません。そして、根本の性格の變化はないにしても、年相應の大膽さも意地も持つやうになりました。女性に對する批判や感情に於ても少くとも純一でなくなつたことは争へないのです。

けれども、「自分の前に幸福が、光が、楽しさが待つてゐようとは思ひません。また待つてゐてくれよと願ふ心もございません……」と、書いた瀧子は、その偶然の——さう云つ

て好いと僕は思ひますが——詞が行手を暗示したやうに、不幸な運命の渦に卷かれてゐたのでした。彼女の結婚生活は一つの悲劇でした。京都のボン、さんとして育てられた彼女の夫は典型的の放蕩兒でした。そして、女學校教育を受けた世間的に初^{はつ}な、純な、素直な處女性を持つた、娼婦系の何物をも備へてゐない無技巧な温順な瀧子に初めは物珍らしさの愛を持つてゐたのですが、それは直ぐに残酷に冷めてしまひました。また同時に關西氣質^{かたがひ}の兩親からは氣に入られずに、痛ましく無能呼ばりをされました。結局、悲惨な結婚生活の三年目に一人の愛兒を残して瀧子は離縁されてしまつたのです。彼女は其處に恐ろしい世間を見ました。恐ろしい男性を見ました。けれども、彼女の性格はその世間にその男性に鋭く根本的に反抗する程強くはありませんでした。泣き、悲しみ、悶え、苦しみながらも、彼女はそれを運命として諦め、忍従する女でした。

この三年間に異つた運命を擔つてゐた僕と瀧子とは、その初めに偶然に導かれたやうにまた偶然に導かれて今年の春久振に會つたのです。二人は過去の二人を懐しく思ひ浮べま

した。二人は過去の弱さ、意氣地なさ、臆病さを少くとも表面的には喪つてゐました。二人は東京の町を自由に語り合ひながら、ランデヴウを楽しむことが出来ました。花瓣に籠められた永久に最後の熱いキスは最後のキスではなくなりました。そして、僕は瀧子の自分に對する愛が、熱情が再び其處に蘇つて來たのをまさまざと感じました。蘇つて來たのではなくて、恐らく彼女は最後の手紙に云つたやうに、三年間それを自分の胸の中に堅く封じてゐたのかも知れません。

けれども、何と云ふことでせう。僕はその瀧子の心を受け容れようとしながら、何處かに受け容れまいとする心の潜んでゐるのをどうすることも出来ないのです。ふとそれに氣が附いた時、僕は胸に或る苛責を感じました。僕は受け容れようとする心を恐ろしいと思ひました。受け容れまいとする心を憎いと思ひました。僕は其處に心と肉との反射し合ふのを見たのです。

「これからどうしようかと思ふと、私、ほんたうに泣きたい程心細くなりますのよ……」

と云ふ瀧子の詞の裏に、「その救ひ手になつて下さいませ……」と云ふ聲が隠れてゐるやうな氣がするのです。僕は自分自身が不幸な彼女の境遇にとつては、現在に於て最も光ある救ひ手に相違ないことを感じました。僕が或る物を見、或る事を聞く眼と耳とを覆つてしまふことに依つて、彼女を救ひ得るのだと云ふ氣がしました。けれども、眼と耳を覆ふことが僕に出来るでせうか。僕は迷ひました、惱みました。而も、その迷ひと惱みの前に、自分に對して燃えようとしてゐる彼女の愛と熱情とが日毎に強くなつてくるのを感じずにはゐられませんでした。僕は彼女に對して何處かに執著を感じながら、會つてゐることが息苦しく恐ろしくなつて來ました。

——自分は確に瀧子を愛してゐるのだ。然し、彼女の愛や熱情を受け容れることが出来ないのは、若しかしたら彼女が處女でないこと、子供を持つてゐること——其處から惹き起される小さな感情からではなからうか。そして、それは愛のために忘れらるべき感情ではなからうか……と、僕は一人になつた時かう考へずにはゐられなかつたのです。そして、

瀧子と結婚して彼女を救ふことが自分の當然しなければならないことのやうに思ひました。けれども、さうした心持を實際的に一步進めなければならぬと思ふ時、根本的に性格の臆病な、弱い優柔不斷な自分が顔を出してしまふのです。僕は動きのとれない心持に苛々しながら、空しい日を過してゐました。

——やつぱり駄目だ。自分にはどうすることも出来ないのだ。あるがままの運命にすべてを任せるより以上の力も意志も自分にはない……と、僕は最後にかう思ひ諦めました。

五月の末でした。再び僕と瀧子の別れる日が來ました。彼女は郷里の母から急に呼び寄せられることになつたのです。僕にはもうそれをどうしようとする氣持もありませんでした。すべてはなるやうにしかならぬもののやうな氣がしました。そして、見送らうとした約束さへ破つてしまいました。

「何事も運命と諦めてをります。所詮は弱い女の身と生れた不幸でございます。ただ、あなたから久しくお便りを戴けないのがしみじみ寂しく、恨めしう存じます……」

十日程経つてかうした瀧子の短い手紙を受け取つた時、僕はすべてが、すべての彼女の不幸な運命の推移が自分自身の性格の弱さ、意氣地なさ、臆病さから惹き起されたやうな気がして、瀧子のために涙ぐんでやりました。が、その涙ぐんだ自分の心持を彼女に傳へようとは決して思ひませんでした。そして、答への手紙は幾日か書かれずに過ぎてしまいました。

Vengeance

八年十一月作

小造りな體を人波の中に埋めた拘摸の金次は、中折の鐔の影に白い眼を光らせながら、さつきからその男を覘つてゐた。

——釦、外套の釦……と、金次は少しじれて腹の中で考へてゐる。そして、何時も蜥蜴の尻尾のやうにはしつこく動く右手の人差指と親指とを、鼠色のインパネスの下でもじもじさせてゐる。時々瘤のやうな小さな脹らみが袖の斜面にむくりむくりと浮み上るのが見える。「そりやお前、釦の堅いのが分るやうぢや駄目さ……」と、その指先をどんなに操るのか、金次は若い時分から洋服の釦外しが腕自慢だつた。が、今はその手を出し兼ねてゐる。男の様子になかなか隙が見えないからであつた。

——こいつあ事に依ると崇られたぞ……金次はぼおつと重い頭の中や、變に出澁るけだるい手先を氣にしながら、ふとかう思つた。彼は前の晩馴染の女の處へ出掛けて、夜更けまで強に飲み續けた。そして、その朝遅く眼が覺めて別に歸る積りもなかつたのが、午後になつて急に氣が變つて、と云ふのは、青島から歸つてくる凱旋軍隊の通過でその品川停

車場が賑ふと云ふ事を聞き附けたので、何日か不漁しほ続きの跡のちよいとした思附で、網を張りに其處へ出掛けたのであつた。で、——日頃の頭と腕の冴えが、ひよつとしたら二日酔のせぬだ……と、彼は考へたのである。

——畜生つ、忌々しい……と、金次は變に氣遅れのする自分自身と、厭やに油斷の無い相手の様子にやきもきしながら、そつと舌打ちした。

規はれてゐるのは金次と斜に肩と肩とを擦れ合せてゐる、ダブル釦の焦茶の厚い外套を著た、洋服姿の若い男である。彼は少し猫脊の體を時々大きく揺す振つて、がらがらした太い聲で笑ひながら、友達らしい四五人と快活に話し合つてゐる、口を開く度に煙草のやゝに汚れた、ひどく並びの悪い齒が見える。そして、可成り煙草好きと見えて、右手の指の間に巻煙草を絶やした事がない。で、その足元の、からからに凍り著いたプラツトホオムの上にはもう五つ六つの吸殻が散らばつてゐる。中にはエジプト巻の金口も混つてゐる。金次は幾度かその芳しい香氣をむつと顔に浴せ掛けられた。

——會社員かな……金次はちよいとその人柄の當がつき兼ねて、かう考へてみた。そして、またちらつと横目を男の顔に投げた。

「何でも、砲手がすつかりやられてしまつた跡を一人で引受けて、有効な射撃を續けたんださうだよ。あの溫和しい男がと思ふと、ちよつと意外だね……」と、男と向ひ合つた丈の高い大學生の一人が感激してゐるらしい語調で云つた。

「さあ……、然し、菅沼はあれでなかなか顔に似合はない度胸のある男だよ。溫和しいと見える處が、その曲者さ……」と、男は神経質らしい濁つた眼をじろりと相手に注いで、皮肉な顔附でにやりと笑つた。

「曲者だつて、そりやあ少し酷過ぎるが、とに角、己達中學の仲間から金鷄勳章を貰へさうな殊勳者が出るなんて、ちよつと愉快ぢやないか……」と、それに軽く笑ひ返してかう答へたのは、茶の氣取つた色の二重廻しを著た商人風の一人だつた。

「ふん、菅沼も運の好い奴さ。無事に歸つてはくるし、一年志願なんがでちよいと出て殊

動にはなるし、全くこんなのがあつちやあ死んだ者は浮べれないね……」と、男は頭の上の裝飾提灯の翻るのを見上げながら云つて、煙草の吸殻をコンクリイトの上に叩き著けた。

——會社員でもねえな……と、金次は叩き著けた拍子に脇腹に軽く觸つた男の手にどきつとしながら打ち消した。そして、訝るやうな眼で男を見返つた。

S——親分の身内で何時からさう呼び慣はしたか、ハゲ鷹の金次と云へば仲間でもちよつと幅利はばきりである。長年泥水に染まつた遊び人渡世の、その若い時分は冴えた腕が自分でも自慢だつた。が、今はもう五十に手が届く、その年が腕を腐らしたかと思ふと彼は時々味氣なくなる。それに何と云つてもこの頃は取締がひどく厳しくなつて仲間も散り散りである。で、未に一人者で流浪しながら、悔いと寂しさで地道に生きなければならぬとしみじみ考へる事もあつた。その金次が、一度かうと見込をつけたら——と云ふ自信のある金次が、今はその青二才に手が出せなかつた。それは前夜の祟りで彼の頭と腕がぼやけてゐるばかりではない。全くその男の様子に、若い癖に弛みが見えなかつた。が、男は別にこれ

と云ふ氣配りをしてゐるらしくもない。如何にも話に夢中になつてゐて、浮き浮きした調子で笑ひ續けてゐるのである。向うを向いてゐても何となく背後うしろに眼のあるやうな氣持のする男、それでなくとも、少し蒼白い顔の、高い段鼻の兩脇に凹んで据わつた眼の閃きが、金次には妙に氣になつた。で、手先が蔓草の絡み手のやうに男の胸の方に延びようとしたが、その氣遅れがその手をしななといぢけさせてしまふのであつた。

——氣のせぬかな……と、金次は鼠のそののやうな小さい眼をきらりと男に向けて、小首を傾けた。と、「怖がるな……」と云ふ聲がする。「腕に蓋が立つたんだ……」と云ふ聲もする。が、もともと意地つ張りで、負けず嫌ひの彼は相手がさうなればなるだけ、引き下がるのは業腹だつた。それに一度當を著けたカモを外すのは仲間内でも忌む事だつたし、また何と云つても彼の腕に對する自尊心を、誇りを傷つける事でもあつた。で、彼はどよめく人波のいきれと、腹の中の苛々した氣分に内外うちととから責めつけられながら、むざむざ時を過すより外はなかつた。

一體、金次はそれから何分か前に出迎へ人に紛れて、何喰はぬ顔でプラットホームに流れ込んで来たのである。と、案の定其處は、その軍用列車の到着にはまだ三十分程も間があらうと云ふのに、凱旋氣分とでも云ふのか、妙に浮き浮きと興奮した人達がもう一杯に詰め掛けてゐた。そして、天井や柱には萬國旗や色提灯が、折から眼の前の埋立ての廣場から横撫でに吹き著けてくる二月のからつ風に翻つてゐる。人達の手には改札口で在郷軍人會の役員から渡された小さな紙の日章旗がはためいてゐる。煙草の烟、酒の香、その間には變てここに景氣づいた人達の談笑の聲が湧き返つてゐたのであつた。

——こいつあうめえ……と、金次は針先のやうな視線を密に周圍に注いで、ニツとほくそ笑みを口元に浮べた。と、その時、プラットホームの中程まで人波を縫つて進んだ彼の眼に映つたのが、待合室の前に丸く固まつて、耳障りのやうな高聲で話し合つてゐる、その男達の生き生きした、賑かな一群であつた。

「とに角、著いたら直ぐにあのレストラントへ引つばつてつて、盛に祝杯を舉げてやらう

ぢやないか……」と、金次がひよいと立ち止まつてじろりと其處へ視線を投げ掛けた時、かう云つたその男の勢の好い聲が彼の耳に著いた。金次はその變に調子づいた、人を喰つたやうな様子がぐいと小癢に障つた。

——あいつめ……と、金次は胸の中で頷いた。そして、處々に立つてゐる憲兵や巡查や刑事——「ふふん、奴は刑事だな……」と、譯もなくその姿を見破つて——彼等の鋭い眼に繊細に氣を配りながら、彼は何時ものやうに全く理窟なしに、直感的にカモと睨んだ、その男に近づいて行つた。

と、彼は忽ち偶然人波に押されて我知らずよろめいたやうに装ひながら、しきりに喋舌り續けてゐる男の右横から胸に向けて、抱き著くやうに倒れ掛かつた。それは金次が品物のありかを確認する何時もの慣れきつたやり方だつた。で、その瞬間、彼の鋭敏な右の手先はインバネスの影で男の胸をもうじわりと撫でてゐた。

「これは飛んだ粗相を……」と、金次はあわてた様子を繕つて、尤もらしく詫びた。

「いや……」と、男は氣にも留めない顔附で答へた。そして、「だいぶ詰め掛けて来たね……」と、金次の肩越しに人波を見返りながら誰に云ふとなく呟いた。が、その右手は凭り掛かつた金次の體の重味をぐいと支へてゐたのである。

金次は男の落ち著き拂つた態度にちよいと氣を呑まれた形だつたが、腹の中では——チヨツキ、右の裏がくし、紙入……と頷きながら、素知らぬ顔で身を立て直した。そして、男から眼を反らすと、前に並んだ人達の間から見える品川の臺場の方を眺めた。と、その眼には遠い臺場の石垣に波が白砂糖のやうに碎け散つてゐるのが、見るともなくはつきり映つた。が、その意識は男の外套のけば立つた面に擦れ合つてゐる自分の左腕のくるぶしに集中されてゐた。

——さ、どう取り掛かるか……と、金次は考へた。

それから何分間か、金次は一心にその男に對する機會を窺つてゐたのである。が、彼が今までに滅多に經驗した事のない、我ながらのブマさ加減にじりじりしてゐる内に時間は

進んでゐた。で、彼がひよいと氣が附いた時、プラットホオムは出迎へ人で殆ど一杯になつてゐた。もうコンクリイトの面も見えないくらゐであつた。そして、風が柴笛のやうに電線に鳴つてゐる、その二月の吹き曝しの、プラットホオムの刺しい寒さも人のいきれで消される程であつた。脊の低い金次の、頬骨の出ばつた痩せ顔はぼおつと赧らんだ。

「然し、菅沼の細君も國で首を長くして待つてゐるだらうな……」と、男と向ひ合つた大學生が云ふのが、ふと金次の耳を打つた。

「待つてゐる處ぢやないよ……」

「全くだ。去年の九月に此處へ送りに來た時、汽車が出てしまふと、細君、泣き出してしまつたぢやないか……」

「さうだつたつけね。然し、それだけにどんなに嬉しいか分りやしまい……」と、男は仲間の會話にかう口を挿んで、微笑した。

——畜生つ、好い氣な事を云つてやがら……と考へて、金次は急にむかむかと腹が立つ

た。そして眼を光らせながらじろりと男を見返つた。が、男の様子に怖氣おそけづいてゐる金次は、ただ堅くなるばかりだつた。どうにも手を出せないものであつた。

——畜生め、どうすりやあ好いんだ……と、金次はインパネスの袖下で手先をもてあくみながら、また考へた。所在に迷つた彼の眼は自然に人波の方に向つた。

「おい、饅頭配る手順は著いたか……」と、その途端に、ブリツヂから、古びた勳章を胸に並べた在郷軍人の老中尉がひよこりと降りて来て、待合室の傍の、これも在郷軍人章を附けた三人の兵士の群に頭越しに聲を掛けた。

「はつ、著きました……」と、兵士の一人がぎくしゃくした聲でそれに答へ返した。

人達はその聲に氣を取られて、暫くまじまじと中尉と兵士を見較べてゐた。が、次の瞬間、一人がぐすりと笑つた。また一人がぐすりと笑つた。と、それに續いて四五人が一緒に笑ひ出した。

「中尉殿、私にも一個願ひます……」と、その低い、密やかな笑ひ聲の間から、急に、誰

ともなくふざけた聲でかう叫び上げた。

と、あたりの浮き浮きした空氣に酔はされてゐる群衆は、その聲にもう他愛もなく可笑しさを刺戟されて、一時にどつと笑ひ崩れた。そして、人波がうねりうねつた。拍手、足擦り、口笛——その耳を潰すやうな野次の騒音があたりに巻き返つた。老中尉はそのどよめきの間を、一時に自分に注ぎ掛けられた群衆の視線に苦笑を返しながら、ひよこひよここと兵士に近附いて行つた。

「はははは、饅頭は好い。己も兵隊になつて一つ食はして貰ひたいなあ……」と、男と向ひ合つた大學生が腹を抱へて笑ひ出した。

「ははは、それもさうだが、まああの中尉殿の顔を見ろよ。ちよつとじねんじよと云つた感じだね……」と、男は體をぐらぐら揺す振つて笑ひながら、當惑した老中尉の皺の寄つたでこぼこ顔を、面白がつて見送つた。その全く可笑しさに我を忘れてゐると云つた様子が、ひよいと眼に留まると、金次は思はずちり毛をふるつた。

——此處だ……と、彼はキラリと眼を光らせた。

と、もう金次の體は群衆のどよめきに揺り返されたやうに見せかけて、ひたりと男の上半身に凭れ掛かつてゐた。そして、その低い鼻先が男の耳の附根に迫つた時、彼の右手先はインパネスの袖下をす早くくぐつて、男の外套の釦の列を縦にするりと撫でた。續いてそれが石垣に這ひ込む蜥蜴のやうに外套の厚毛の羅紗の間を滑つた時、もう背廣の二つの釦は穴を外れてゐた。——占めた……と、殆ど偶然の氣の弛みが、金次の胸を過ぎた。と、その刹那にチョツキに掛からうとした中指の爪が、釦の凹みにづきん突き當つた。

——しまつた……と、反射的の恐怖が指先を抑へた時である。また笑ひ出した男の右頬の蒼白い、きめの荒い皮膚が、金次の眼とすれすれにザボンの皮のやうに揺れて見えた。

「おい、まだほやほやだぜ……」と、その途端に、男は金次の體の重味に無意識に身を引いて、在郷軍人達の扱つてゐる一二間向うの菓子箱を覗き込んだ。弾みを食つて金次の體はひよいとよろめいた。と、我知らず引き抜かうとした彼の右手と、撥ね返すやうに揺す

振つた男の右手が軽くぶつかり合つた。——ドヂを踏んだな……と思つた時、金次の手はもう彼のインパネスの袖下にくの字なりにすくんでゐた。彼は男から背中合せに身を立て直して、袂から巻煙草を取り出して口に銜へた。男は彼の背後でがらがら笑つてゐた。

數秒間が其處に過ぎた。金次は銜へた煙草に點火しようとした。彼は若い時分に初めてドヂを踏んだ時のやうな胸騒ぎがした。が、今の場合、それは見附かると云ふ不安からではない。彼は機會を取り遁した事に對する軽い忌々しさと、その瞬間にまさまさと曝け出された自分の腕の鈍重さに強い失望を感じさせられた。——何の事だ、だらしがねえ、こんな己ぢやあなかつたんだ……と、ふと考へて、彼はしみじみ情無い氣持になつた。そして、冴えを失つた腕に對する不安が堪らなく胸をついばんだのである。彼は俯向いたまま、暫くその不安と戰つた。と、其處に何時となく重つて行く年の瀬が自分のすべを衰へさせてしまつた事が、今更にまさまさと感じられた。彼は暗い氣持になつて、眼の前の柱に下がつてゐる色提灯をちつと見詰めてゐた。

「おい、小野、釦をどうしたんだい……」と、その時不意に金次の背後で大學生の聲が聞えた。豫期した事ながら金次は我知らず、どきつと胸を衝かれて、耳を澄ました。

「なに釦……」と、男は驚きの聲を上げた。明にその聲は度を失つてゐた。金次は衝撃を受けた男の體の動搖を背中に感じながら、身をすくめた。

「掏摸だ……」と、それと氣附いたらしい男は、胸を急激にまさぐりながら聲高に叫んだ。

「なに掏摸……」と、男の仲間の一人が顔色を變へて訊き返した。

金次はその瞬間、同じやうなあわてた様子を装つて、人達の顔色を窺つてゐた。

男を中心にして七八人の人群は小さく波打つてどよめいた。彼等は驚きと不安とに顔面筋を硬張らせて、今更らしく自分達の身の廻りに氣を配つた。若い丸髻姿の女はあわてて胸を抑へた。一人の老人はせかせかと袖を探つた。或る者は自分でなかつた事に安んじて、忽ち硬張つた顔をくつろがせた。

「何かおすられですか……」と、男と向ひ合つた大學生の背後にゐた、スコツチの外套を

著た中年の紳士が、親切氣を見せて訊ねた。

「おい、大丈夫かい……」と、大學生がそれにつけ加へて、ちつと男の顔を覗き込んだ。

「はははは……」と、男は突然興奮した聲で笑ひ出した。彼は安堵の表情と同時に、掏摸に對する勝利を示すやうな得意の眼を輝かした。その右手には洋袴ツボの前がくしから取り出した小型の鎖無しの金時計が握られてゐた。「時計は御覽の通り、紙入は此處、何もやられるもんか。掏摸先生すつかり當が外れた形だね……」と、彼はチョツキの胸を叩いて見せながら、勝ち誇るやうに云つて笑つた。

「そいつは好かつた……」と、商人風の一人が云つた。人達は互に眼を見合せた。

「然し、氣を付け給へ。そのへまな掏摸先生、まだこの邊にゐるかも知れないよ……」と彼は侮蔑の眼でじろりとあたりを見廻した。そして、續いて不快さうに口を尖がらせながら「莫迦莫迦しい、そんなとんな奴にやたらに物を掏られて堪るもんか。人を見損つてやがる……」と、男は掏摸の存在を豫想して、それに當てこするとでも云つたやうに咳い

た。

金次はその間、素知らぬ顔で耳を傾けてゐたが、その男の詞を聞くと、少しむかつとした。それは明に彼に對する劇しい侮辱の詞であつた。二三分前に——ドヂを踏んだ……と思つた時、彼の胸を過ぎた忌々しさと失望の心持をもう一度彼の意識の中に引きずり込んで、それを二重に強く感じさせる詞であつた。殊に、「とんま……」と男の口から嘲るやうに洩れた聲は彼の心に堪らない憤懣を感じさせた。それは彼の腕に對する自信と誇とを根本的に覆へされたやうに不愉快に聞えた。彼は何時ものやうに冷靜な彼ではゐられないやうな氣持になつて來た。が、何としてもその場合、彼は技の敗者には相違なかつた。彼は男の方を偷み見る氣力さへ失つて、ちつと唇を嚙んでゐた。

——畜生め、小癩に障る野郎だ……と、金次は口惜しさにじりじりしながら、そつと腹の中で呟いた。——だが、全く己も若え時のやうぢやねえ……と、風の荒んでゐる品川沖の方に見るともなく眼を送りながら、金次はまたさう思つた。その顔は幽かに蒼白かつた。

そして、三四度しばしばさせた眼は何時か曇つてゐた。

「然し、背廣の釦を外されるまで知らないなんて、君も迂濶だね……」と、大學生は幾分からかひ氣味に、誇張した聲で男に云ひ掛けた。

「迂濶だつて……だが、要するに釦を外されたまでの話さ。肝心な處はやられちやゐないからね……」と釦を一つ一つ掛け直しながら、男は小面憎い程の虚勢を張つて、なかなか自分の弱味を承認しようとはしなかつた。

「ふふん……」と、大學生はうそぶいた。

「さうさ、拘摸にやられたりする奴は、よつぼどぼんやりだよ、よつぼど間抜けだよ……」と、男は大學生の詞に幾らか感情を損じたやうな顔附で云ひ返して、ふと口を噤んだ。

が、側でちつと耳を傾けてゐる金次には、男の詞の一々が變に傲慢で、つけつけしく響くのが、痾に障つてならなかつた。そして、——何處までも好い氣な野郎だ……と思ふと、男に對する反感がぐいぐい胸に蟠つて來た。然し、金次はどうする事も出来なかつた。の

みならず、その罵言や嘲弄や侮辱のすべてが僅かの間の自分のドチから生れて来たのだと思ふと、彼は今更に自分の身が口惜しかつた。彼は自嘲と男に對する憤懣で胸が煮え立つのを堪へながら、憎しみの眼でじろりと男を見返つた。と、また彼は男の神経質な眼の光にぶつかつた。

「然しね、今のは向うも全く新米な奴さ……」と、その途端にかう冷嘲するやうに云つた男の聲が、金次の耳にづきんと響いた。

——何だと、今に見てる……と、金次は男の大風な物の云ひ振に堪らない苛立たしさを感じて、かう腹の中で云ひ返した。

「汽車に御注意を願ひますよ……」と、その時、線路に沿うたプラットホオムの端を渡りながら、朗かな聲で若い驛夫が叫んだ。と、群衆は云ひ合せたやうに顔を上げて、上り線の方を見返つた。その眼は期待と歡びに輝き出した。

「おい、いよいよ來たぜ……」と、大學生がはしやいだ聲で男に云ひ掛けた。

「さうだ、いよいよ來たね。つい詰らない事に氣を取られてすっかり忘れちやつてたよ。二時四十二分と、ほんともう直ぐぢやないか……」と、男はプラットホオムの時計を見上げながら、急に晴れ晴れしい笑顔を見せて大學生に相槌を打つた。

「ふん、兵隊さんが著くんだな……」と、金次も何となく凱旋の人々を待つてでもゐるやうな氣持になつて、緊張したあたりの群衆を見廻した。が、その視線にひよいと男の顔が映ると、彼はまた忌々しさが胸に込み上げて來て、眼を反けた。彼は——もうちよつとだ、せくなせくな……と、自分を叱り附けながら、男の側からそつと離れて、プラットホオムの反對の側に歩いて行つた。そして、男から二三間の處に人波を分けて立ち止まると、煙草を吸ひ出した。が、その眼は風に吹き散る烟を通して絶えず男の上に注がれてゐた。

何分間か、プラットホオムのどよめいてゐた空氣は抑へ著けられたやうに鎮まつた。人達は變に生真面目な顔附になつて、唇を堅く結んだまま佇んでゐた。そして、そのあたりは静けさは、その中に限りない無言の歡聲が潜んでゐるやうな、不思議な緊張した静けさ

だつた。と、暫くすると、突然埋立ての廣場の空でけたたましい爆竹の音が鋭く響き渡つた。それは歓迎の合圖であつた。

「来た、来た……」と、群衆は一時にどよめき立つて、呻くやうな聲を上げた。

機關車の軽快な軌りがレエルの上に響いた。群衆はその響の方に惹き寄せられたやうに雪崩れて、また雪崩れ返つた。そして、軍用列車はその雪崩れを追ひ掛けるやうにプラットホームに滑つて来たのであつた。と、その瞬間、全く一つの暗示に結び著けられたやうに、列車の窓とプラットホームの上で、一時に狂ふやうな歡呼の聲が交響し合つた。それは迎へる人と迎へられる人とが歡喜と感動の涙の内に、我を忘れて叫び上げた火のやうな「バンザイ」の聲だつた。汽車はその聲と、夢中に振り廻される歡迎旗の色彩の影に靜に止まつた。見る間に、車窓の下は興奮した人達で一杯になつた。若い兵士と抱き合ふ老人があつた。士官と握手し合ふ紳士があつた。「バンザイ」は間斷なく叫び續けられ、旗の波がめまぐるしいやうに揺いだ。

その騒ぎに紛れて小男の金次の姿は暫く見えなかつた。

が、何分かの後、小鼠のやうにブリツヂを降りてくる金次の姿が、人波の中に現れた。彼は細い眼を一そう細くして、「ふふふ、ふふふ……」と、ほくそ笑みを口元に浮べながら、改札口から廣場の群衆の中にするすると見えなくなつてしまつた。

その夜、金次が京橋八丁堀の何時もの隠れ家へ一人歸つて来たのは、木枯しに町並もひっそり寢鎮まつた十時近くであつた。

品川から隠れ家近くの小料理屋に来て、若い女中と軽い笑談口を交へながら好きな酒をグビリグビリ始めるまで、金次の心には男に對する復讐の快感と、自分の腕に對する自信を見事に新にした満足とが一杯になつてゐた。刀の刻みの沖えた木彫面を見るやうな、小さく引き締まつた彼の顔には、口元のあたりに幽かに三條四條流れた小皺を二重にも三重にも波立たせるやうな得意の微笑が絶えなかつた。そして、彼はつむぎ、縞の懷に重味のあ

るなめし革の紙入の肌觸りを密に感じながら、舌なめすりをしては女の酌を楽しんでゐた。
 「親方、何か嬉しい事があつたんでせう。ほんとに今日は御機嫌ね……」と、女は金次の静脈の浮いた、黍殻色の左手に、徳利を支へた、白く脂肥りのした、艶の好い手を差し著けながら、彼を流し目に見た。

「ふふ、ふふふ……」と、金次はとろんとした眼を細めながら、盃に注がれる酒の波を氣持好ささうに眺めた。

「まあ憎らしい。思ひ出し笑ひなんかしてさ。何か奢つて頂戴よねえ……」と、小料理屋の女中の、それが精一杯の愛嬌だと云ふやうなしなを作つて、女は金次の膝頭を叩いた。

何時もならさうした女の使ひ古しのしなを胸の中で嘲笑つて済ます金次も、それが他愛なく相好を崩させてしまふ程彼には嬉しい物に感じられた。で、そんな事で金次の心持は譯もなく浮き立つて来て、また座に加はつた女中の二三人を相手に調子づいて盃の數を重ねて行つた。が、前夜からの二日酔か、停車場での男に對する氣疲れか、性根はふだんの

やうにはつきりしてゐながら、金次は何時にない沁み通すやうな酒の廻りを體に意識した。足腰がふらついたり、抑へようとしながらも盃を支へた左手が自然に顫へ出してくるのをとどめやうもなかつた。彼はふと盃を置いて酒臭い息をふうつと吹いた。

「もう止めた。やに酒が利きやがるなあ……」と、金次は吐き出すやうに云つた。

「あら、もうお止め……」

「もつとお飲みなさいよう、ねえ親方。まだそんなでもないのにさ……」

「お酌がお氣に召さないの……」

女達はむつちりと肥えた、若やいだ體の、甘たるい白粉の香を金次の鼻先に匂はせながら、上ずつた聲を揃へて云つた。が、彼はそれに答へようともせず、暫く赧らんだ眼にとろけるやうに映る疊の目をぢつと見詰め續けてゐた。また寂しさが、拭へないやうな寂しさがその胸に蘇つて來た。

「己も酒が弱くなつたなあ。ほんとに若え時分のあの元氣は夢のやうだなあ……」と、金

次は女達の若々しい姿に嫉妬を感じたやうな視線を向けて、やがてふと思ひ出したやうに云つた。

「まあ、急に何をおつしやるのよ。そんな心細がるお年でもない癖に……」と、女の一人が俯向けた金次の憂鬱な顔色を追ひながら、故意とはしやぎの聲で云つた。

「いや、さうぢやねえ、さうぢやねえ……」と、金次は女の聲を抑へるやうに、我となく呟いた。

取り返しのつかない或る物の苛立たしさ——それがまた金次の頭を掠めて過ぎた。——年を數へるやうになつちやあ……と、自分でも絶えず思ひながら、その頃の彼にはそれがまるで癖のやうに年の瀬が顧みられる。自分の老を慰めてくれる、或は死水を取つてくれる妻子も持たずに、女から女に、酒から酒に、そして、ただ、えた腕に任せて技のエクスタシイに酔ふが楽しみなばかりの拘摸渡世を金次は送つて來たのだつた。二三度は暗い處に臭い飯を食つて來ながら、それでも罪を意識もしない今までの彼だつた。彼は技の勝者

である誇りの拘り取つた金で、その日その日を遊び人らしい歡樂に浸り續けてゐた。が、その頃になつて彼は何かにつけて體の老を、冴えてゐた腕の鈍りを感じずにはゐられなかつた。夢のやうに渡つて來た半生と、頼りない老後の生活が、返し難い悔恨と寂寥とで彼の胸をついばむのだつた。

「まあお宜しいぢやありませんか……」と、女達が引き止めるのを振り捨てて、舌に残る苦い酒の味を噛みしめながら、やがてさうした時の何時もの癖で、金次はブイと小料理屋の門口を通れるやうに立ち出てしまつた。そして、さつと毛孔に刺し通すやうな木枯しに我知らず身顛ひしながら、彼は逸散に我家を差して足を早めた。もうその時、彼の心にはひと時の浮き立つた歡樂の甘さも、男に對する復讐の快感も、腕に對する自信を新にした満足もかき消されてゐた。

翌日からハゲ鷹の金次の姿はもう隠れ家に見られなくなつた。そして、その日の夕方、

男は書留水包で送られた掏られた自分の紙入を手にしながら、掏摸の技の冴えに對する讚歎の聲と、水際立つた、鮮かな復讐を快く受けた時の朗かな笑ひを、唇に浮べてゐた。

一 兵卒と銃

八年十一月作

霧の深い六月の夜だった。丁度N原へ出張演習の途上のこと、長い四列縦隊を作った我々のA歩兵聯隊はC街道を北へ北へと行進してゐた。

風はなかつた。空気は水のやうに重く沈んでゐた。人家も、燈^{とも}灯^びも、畑も、森も、川も、丘も、そして歩いてゐる我々の體も、灰を溶したやうな夜霧の海に包まれてゐるのであつた。頭上には處々に幽かな星影が感^あじられた。

「おい小泉、厭やに蒸すぢやないか……」と、私の右隣に歩いてゐる、これも一年志願兵の河野が囁いた。

「さうだ、全く蒸すね。悪くすると、明日^{あした}は雨だぜ……」と、私は振り向き^{むき}様に答へた。河野の眠さうな眼が闇の中にチラリと光つた。

「うむ……」と、河野は頷いた。「然し、演習地の雨は閉口するな……」と、彼はまた疲れたやうな聲で云つた。

「ほんとに雨は厭やだな……」と、私はシカシカする眼で空を見上げた。

夜は大分更けてゐた。「遼陽城頭夜は更けて……」と、さつきまで先登の一大隊の方で聞えてゐた軍歌の聲ももう途絶えてしまつた。兵營から既に十里に近い行程と、息詰るやうに蒸し蒸しする夜の空氣と、眠たさと空腹とに壓されて、兵士達は疲れきつてゐた。誰もが體をぐらつかせながら、まるで出來の悪い機械人形のやうな足を運んでゐたのだつた。隊列も可成り亂れてゐた。

私の左側にゐる中根二等卒はもう一時間も前から半分口をガラリと開けて、眠つたまま歩いてゐた。平生からお人好しで、愚圖で、低能な彼は、もともとだらしない男だつたが、今は全く正體を失つてゐた。彼は何度私の肩に倒れかゝつたか知れなかつた。そしてまた何度私は道の外へよろけ出さうとする彼を抑へてやつたか知れなかつた。

「おい、寝ちやあ危いぞ……」と、私は度毎にハラハラして彼の背中を叩き著けた。が、瞬間にひよいと氣が附いて足元を堅めるだけで、また直ぐにひよろつき出すのであつた。「みんな眠つちやいかん……」と、時々我々の分隊長の高岡軍曹は無理作りのドラ聲を張

り上げた。が、中根ばかりではない、どの兵士達ももうそれに耳を假すだけの氣力はなかつた。そして、まるで酒場の酔ひどれのやうな兵士の集團は濕つた路上に重い靴を引き摺りながら、革具をぎゆつぎゆつ軌らせながら劍鞘を互にかち合せながら、折々寢言のやうな唸り聲を立てながら、まだ五六里先のN原まで歩かなければならなかつた。

「F町はまだかな……」と、また河野が振り向いて、思ひ出したやうに訊ねた。

「もう直きだ。よつ程前にE橋を渡つたからな……」と、私は眠たさを堪へながら生返事をした。

「さうか、それでもまだ先はなかなか遠いなあ……」と、河野は右手の銃を重さうにすり上げながら云つた。

「うん、それもさうだが、何しろ己はもう眠くて閉口だ、此處らでゴロリとやつちまひたいな……」

「全くだ。今一寢入させてくれりやあ命も要らないな……」

「はは、かうなりやあ人間もみじめだ……」と、私は暗闇の中で我知らず苦笑した。河野も私もそのまま口を噤んだ。そして、時々よろけて肩と肩をぶつけ合つたりしながら歩いてゐた。私はもう氣になる中根の事なんかを考へる隙はなかつた。自分自身まるで地上を歩いてゐるやうな氣持はしなかつた。重い背囊に締め著けられる肩、銃を支へた右手の指、足の踵——その處々にツキツキするやうな痛みを感じながら、それを自分の體の痛みとはつきり意識する力さへもなかつた。そして、——寝てはならん……と、一所懸命に考へてはゐながら、何時の間にかトロリと臉が落ちて、首がガクリとなる。足がぐたくたと折れ曲るやうな氣がする。はつと氣が附くと、前の兵士の背囊に鼻先がくつついてゐたりした。

「眠つては危険だぞ。左手の川に氣を附けろ……」と、暫くすると突然前の方で小隊長の大島少尉の呟鳴る聲が聞えた。

私はぎよつとして眼を開いた。と、左手の方に人家の燈灯ともしびがぼんやり光つてゐた——F

町かな……と思ひながら闇の中を見透すと、街道に沿うて流れてゐる狭い小川の水面がいぶし銀のやうに光つてゐた。霧は何時しか薄らいで來たのか、遠くの低い丘陵や樹木の影が鉛色の空を背にしてうつすらと見えた。

「志願兵殿、何時でありますか……」と、背後うしろから兵士の一人が訊ねた。

「一時十五分前だ……」と、私は覺束ない星明りに腕時計をすかして見ながら答へた。

が、さう答へながらも夜がそんなに更けたかと思ふと同時に、私の眠たさは一そう濃くなつた。そして、ふらふらしながら歩き續けてゐる内に現實的な意識は殆ど消えて、變にぼやけた頭の中に祖母や友達の顔が浮び上つたり、三四日前にK館で見た活動寫眞の場面が走つたりした。——夢かな……と思ふと、木の空洞うつつを叩くやうな兵士達の鈍い靴音が耳に著いた。——歩いてるんだな……と思ふと、何時の間にか知らない女の笑ひ顔が眼の前にはつきり見えたりした。仕舞には、そのどつちがほんとの自分か區別出來なくなつた。そして、時々我知らずぐらぐらとひよろけ出す自分の體をどうすることも出來なかつた。

何分か経つた。突然一人の兵士が私の體に左から倒れかかつた。私ははつとして眼を開いた。その瞬間私の左の頬は何かに厭やと云ふ程突き上げられた。

「痛い、誰だつ……」と、私は體を踏み應へながらその兵士を突き飛ばした。と、彼は闇の中をひよろけてまた背後の兵士に突き當つた。「氣を附けろい……」と、その兵士が嗚鳴つた。彼はやつと我に返つて歩き出した。

「中根だな、相變らず爲様のない奴だ……」と、私は銃身で突き上げられた左の頬を抑へながら、忌々しさに舌打ちした。

が、この出來事は私の眠氣を瞬間に覺ましてしまった。闇の中を見透すと、人家の燈ともしびはもう見えなくなつてゐた。F町は夢中で通り過ぎてしまつたのだつた。そして、變化のない街道は相變らず小川に沿うて、平な田畑の間をまっ直ぐに走つてゐた。霧は殆ど霽れ上つて、空には星影がキラキラと見え出した。ひんやりした夜氣が急に體にぞくぞく感じられて來た。

「おい河野……」と、私は變な心細さと寂しさを意識して、右手を振り向いて詞を掛けたが、河野は答へなかつた。首をダラリと前に下げて、彼は眠りながら歩いてゐた。

——然し、みんなやつてるな……と、續いて周圍を見廻した時、私は夜行軍の可笑しさとみじめさを感じて呟いた。四列縦隊は五列になり三列になりして、兵士達はまるで夢遊病者のやうにぞろぞろ歩いてゐるのだつた。指揮刀の鞘の銀色を闇の中に閃かしてゐる小隊長の大島少尉さへよろけながら歩いてゐるのが、五六歩先に見えた。

が、寢そけてしまつた私の頭の中は變に重く、それに寒さが加はつて來てゾクゾク毛穴がそば立つのが堪らなく不愉快だつた。私は首をすくめて痛む足を引き摺りながら、厭や厭や歩き續けてゐた。

「さうだ、もう月が出る時分だな……」と、暫くして私は遠く東の方の地平線が白んで來たのに氣がついて呟いた。その空の明るみを映す田の水や、處々の雜木林の影が蒼黒い夜の闇の中に浮き上つて見え出した。私はそれをぢつと見詰めてゐる内に、何となく感傷的センチメンタル

な気分落ちて来た。そして、そんな時の何時もの癖で、Sの歌なんかを小聲で歌ひ出した。何分かがさうして過ぎた。

と、いきなり左の方でガチャガチャと劍鞘の鳴る音がした。ゴソツと靴の地にこすれる音がした。同時に「ウウツ……」と唸る人聲がした。私がぎよツとして振り返る隙もなかった。忽ち夜の暗闇の中に劇しい水煙が立つて、一人の兵士が小川の中にバチャンと落ち込んでしまった。

——とうとうやつたな……と、私は思った。そして、總身に身顛ひを感じながら立ち留つた。中根の姿が見えなかつた。小川の油のやうな水面は大きく波立つて、眞黒な人影が毀れた蝙蝠傘のやうに動いてゐた。

「誰だ、誰だ……」と、小隊の四五人は川岸に立ち止まつた。

「中根だ……」と、私は呟鳴つた。

混亂が隊伍の中に起つた。寝呆けて反對に駆け出す兵士もゐた。ポカンと空を見上げて

ゐる兵士もゐた。隊列の後尾にゐた分隊長の高岡軍曹は直ぐに岸に駆け寄つた。

「早く上げてやれ……」と、彼は呟鳴つた。

中根は水の中で二三度よろけたが、直ぐに起き上つた。深さは胸程あつた。

「おい銃だよ、誰か銃を取つてくれよ……」と、中根は一所懸命に右手で銃を頭の上に差し上げながら呟鳴つた。そして、右手でバチャバチャ水を叩いた。割に流れのある水はともすれば彼を横倒しにしさうになつた。

「大丈夫だ、水は浅い……」と、高岡軍曹はまた呟鳴つた。「おい田中、早く銃を取つてやれ……」

「軍曹殿、軍曹殿、早く早く、銃を早く……」と、中根は岸に近寄らうとしてあせりながら叫んだ。銃はまだ頭上にまつ直ぐ差し上げられてゐた。

「田中、何を愚圖々々しとるか……」と、軍曹は躍氣やうきになつて足をどたどたさせた。

「はつ……」と、田中はあわてて路上は腹這ひになつて手を延ばした。が、手はなかなか

届かなかつた。手先と銃身とが何度か空間で交錯し合つた。

「留つとつちやいかん、用のない者はすんすん前進する……」と、騒ぎの最中に小隊長の大島少尉ががみがみした聲で呶鳴つた。

岸邊に丸くかたまつてゐた兵士の集團はあわてて駈け出した。私もそれに續いた。そして、途切れに小隊の後を追つて漸くもとの隊伍に歸つた。劇しい息切れがした。

間もなく小隊は隊形を復して動き出した。が、兵士達の姿にはもう疲れの色も眠たさもなかつた。彼等は偶然の出来事に變てこに興奮して、笑つたり、呶鳴つたり、飛び上つたりしてはしやいでゐた。大地に當る靴音は生き生きして高く夜の空氣に反響した。

「とうとう『馬さん』やりやあがつた……」と、一人の兵士がげらげら笑ひ出した。

「選りに選つて奴が落ちるなんてよつぽど運が悪いや……」と、一人はまたそれが自分になかつた事を祝福するやうに云つた。

「また髭にうんと絞られるぜ……」

「可哀想になあ……」

中根熊吉の『馬さん』は二年兵の二等卒で、中隊でもノロマとお人好しとで有名だつた。

教練の度毎にヘマをやつて小隊長や分隊長に小言を云はれ續けだつた。戦友達にもすつかり馬鹿にされてゐた。鼻が低くて眼が細くて、何處か間の抜けた感じのする平べつたい顔

——その顔が長いので『馬さん』と云ふ綽名あだながついた。が、中根は都會生れの兵士達のやうにズルではなかつた。決して不眞面目ではなかつた。彼は實際まつ正直に「天子様に御奉公する」積りで軍務を勉強してゐたのである。が、彼の生れつきはどうする事も出来なかつた。で、彼はムキになればなるだけ教練や武術に失敗し、上官達に叱りつけられ、戦友達にはなぶり物にされるのだつた。——氣の毒だな……と、思ふことが私も度々あつた。

「然し、僕もずる分氣を付けちやあゐたんだぜ……」と、私は傍の兵士を顧みた。

「さうですか。でも、ありやあ好い眠氣覺しですよ……」と、彼は冷淡に答へた。

「ふふ、眠氣覺しも利き過ぎらあ……」

「はつはつはつ、水の中で一所懸命に銃を差し上げた處は好かつたね……」
 「とんだ五九郎だ……」と、誰かが呟いた。劇しい笑聲がわつと起つた。

が、暫くすると中根の話にも倦きが來た。そして、三十分も経たない内にまた兵士達の歩調は亂れて來た。お眠りが始まつた。みんなは下弦の月が東の空に出て來たのも氣が附かずに酔ひどれのやうに歩いてゐた。

N原の行手はまだ遠かつた。私が濡れしよびれた中根の姿を想像して時々可笑しくなつたり、氣の毒になつたりした。が、何時か私も襲つてくる睡魔を堪へきれなくなつてゐた。

N原の出張演習は二週間程で過ぎた。我々は日々の劇しい演習に疲れきつた。そして、六月の下旬にまたT市の居住地に歸營した。中根の話はもうすっかり忘れられてゐた。中根自身も相變らず平べつたい顔ににやにや笑ひを浮かべながら勤務してゐた。

歸營してから三日目の朝だつた。中隊教練が濟んで一先づ解散すると、分隊長の高岡軍

曹は我々を銃器庫裏の櫻の樹蔭に連れて行つて、「休め……」と、命令した。私はまた何かの小言でも聞くのかと思つて、軍曹の鼻の下にチョツピリ生えた口髭を眺めてゐた。

「何でえ、何でえ……」と、小聲でいぶかる兵士もあつた。

高岡軍曹は暫くみんなの顔を見てゐたが、やがて何時ものやうに胸を張つて、上官らしい威厳を見せるやうに一聲高く咳をした。

「今日貴様達を此處へ集めたのは外でもない。この間N原へ行く途中に起つた一つの出來事に對する己の所感を話して聞かせたいのだ。それは其處にゐる中根二等卒のことだ。貴様達も知つとる通り中根はあの行軍の途中過つて川へ落ちた……」と、軍曹はジロリと中根を見た。「クス……」と、誰かが同時に吹き出した。中根はあわてて無格好な不動の姿勢をとつたが、その顔には、それが癖の間の抜けたニヤニヤ笑ひを浮かべてゐた。——またやられるな……と思つて、私は中根のうしろ姿を見た。

「然るに、あの川は決して淺くはなかつた。流れも思ひの外早かつた。次第に依つては命

を奪はれんとも限らなかつた。その危急の際中根はどう云ふ事をしたか。さあ、みんな聞け、此處だ……」と、軍曹は詞を途切つて、ドタンと軍隊靴で大地を踏みつけた。「中根はあの時、自分の身の危急を忘れて銃を高く差し上げて『銃を取つてくれ……』と、己に向つて云つたのだ。即ち銃を愛し守る立派な精神を示したのだ……」と、軍曹は咳一咳した。「抑も銃は歩兵の命である、軍人精神の結晶である。歩兵にとつて銃程大事な物はない、場合に依つてはその體よりも大事である。譬へば戰場に於て我々が負傷する、負傷は直る。然し、精巧な銃を毀したならば、それは直らない。況してあの時中根が銃を離して顧みなかつたならば、銃は水中に無くなつたかも知れない、即ち歩兵の命を失つたことになる。然るに、中根は身の危急を忘れて銃を離さず、飽くまで銃を守らうとした。あの行爲、あの精神は正に軍人精神を立派に發揚したもので、誠に軍人の鑑である。一體中根は平素は決して成績佳良の方ではなかつた。己も度々厳しい小言を云つた。が、人間の眞面目は危急の際に初めて分る。己は中根の眞價を見誤つてゐた。實に中根は歩兵の模範的精神を己

に見せてくれた。實に……」と、感情的な高岡軍曹は躍氣となつて中根を賞讃した。そして、興奮した眼に涙を溜めてゐた。「貴様達はあの時の中根の行爲を笑つたかも知れん。然し、中根は正しく軍人の、歩兵の本分を守つたものだ。豪い、豪い……」

かう云ひ續けて、高岡軍曹はやがて詞を途切つたが、それでもまだ賞め足りなかつたのか、モシヤモシヤの髭面をいきませて、感に餘つたやうに中根二等卒の顔を見詰めた。分隊の兵士達はすべての事の意外さに呆氣に取られて、氣の抜けたやうに立つてゐた。が、日頃いかつい軍曹の眼に感激の涙さへ幽かに染んでゐるのを見てとると、それに何とない哀れつぽさを感じて次から次へと俯向いてしまつた。

が、中根は營庭に輝く眞晝の太陽を眩しさうに、相變らず平べつたい、愚鈍な顔を軍曹の方に差し向けながらにやにや笑ひを續けてゐた。

星

影

九年一月作

——或る恒星の光は五十年後にやつと地球の表面に到達するさうだ。だから、あの無数の星の光の中には、明治維新頃にピカリと光つたのが見えるのもあるんだね。

或る席上でA君が不意にこんな事を云ひ出した。みんなはその詞に何か知ら譯の分らない可笑しさを感じて聲高に笑つた。が、直ぐにみんなは或る不安に襲はれたやうにふと黙り込んでしまつた。然し、また暫くすると、みんなは急にひどく熱心な態度になり、興奮した口調になつて、星の事、天體一般の事に就いて話し始めた。地球と或る遊星とが何時か衝突するだらうと云ふ話も出た。太陽の熱が何萬年後かに冷えてしまふ、そしたら人類はどうなるだらうと云ふ議論も出た。緊張した話はなかなかみんなの唇に盡きなかつた。

——然しね、さうした話はさうした話として、僕は星に就いては悲しい記憶を持つてゐる。ちつと星を見詰めてゐると、僕はそれを思ひ出して堪らない氣持になつてくるのだ。

と、その内にN君がまた不意にそんな事を云ひ出した。みんなはその眼に浮んだ悲痛の影に視線を惹きつけられた。

——いや、こんな事を僕が云つたら、君達はきつと笑ひ出すだらう。全く、こんな詞は安手の感傷に耽りたがる マイノールポエト minor poet 達が使ひ古してゐる脈味な詞だからね。然し、これは僕にとつて眞剣な詞なのだ。實際、僕は星を見てゐると涙ぐむ。僕の母などは星を見るのを怖れてさへゐるのだ。

かう云つて、N君は話し始めた。

僕の家の者は揃つて眼がよかつた。祖母などはもう八十に届きさうになつてゐながら、未だに眼鏡無しで針爲事をしてゐる。無論、長い間の熟練が手の感覚と指先の運びに或る不思議な力を與へたと云へる。が、とに角、祖母はあの小さな針のめどに細い絹糸を通す事さへ出来るのだ。

父は機械學專攻の技術者だから、若い時分は殊に緻密な設計圖や暗い工場を相手に生活してゐたに違ひない。また、僕自身も子供の時から極端に讀書好きで、ずゝ分無理に眼を

使つた。が、父も僕も視覺の故障などを經驗した事はなかつた。小學校にゐる頃僕はよく友達と町を歩きながら遠くの看板の字などを讀み當てつこして、何時も違つた事のないのを得意がつかつたものだ。また母も澄んだ好い眼を持つてゐたし、三人の妹達も小學校の體格検査表には揃つて視力正、眼疾無と記されてゐた。齒科醫の厄介には少しなり過ぎる僕の家の方も、眼科醫の門をくぐつた事だけは全く無い。尤も、叔父の一人が眼科醫を京橋で開業してゐたがね……。

そんな譯で、家ぢゆうの者は自分の眼には安んじきつてゐた。お互に眼の患ひの愚痴を聞く事もなかつたし、また眼の患ひ、視覺の不自由さと云ふものが一體自分にどんな感じを與へるものか全く知らなかつたからだ。で、眼に係る事柄には何でも冷淡、と云ふよりも全く無意識だつた。そして、眼の好いと云ふ事が人にとつて如何に幸福な事か——そんな事は誰も考へてもみなかつた。苦を知らないので、十分樂に安住する事が出来たのだつた。

僕の十二の時に弟が生れた。弟は秀夫と名附けられた。まさか鴻の鳥が運んで來たのだとも思はなかつたが、妹ばかりの處へ秀夫が出來た事は僕をどんなに嬉しがらせたか知れない。上の妹の慶子が生れた時には半分は母の懷を奪はれた焼きもちから「捨ててしまへ捨ててしまへ……」と泣き喚いて承知しなかつた僕も、鼻を抓むやら小さな掌をいぢつてみるやらして、秀夫の誕生に驚喜したのだ。

秀夫は溫和しい靜かな赤んぼだつた。そして、一つはその頃餘り健康の秀れなかつた母の胎にゐたせゐもあらうが、體が小さく、肉附がよくなく、何處となく虚弱じやくじやくさうに見えた。顔色にも赤んぼらしい茹でたやうな赤さがなかつた。そして、眼の白味が少し黒味を含んだ白蠟のやうに、厭やな色に澄んでゐた。時々泣聲を立てても、その聲が震動の悪いオルガンの瓣のやうに低くかすれて、力が無かつた。

「どうも秀夫は少しみんなと赤んぼ振が違ふな……」と、父は秀夫の軽い小さな體を膝に抱き上げて、つくづくその顔を見詰めながら、時々そんな事を云つた。

醫者はよく秀夫の爲めに呼ばれた。が、別にこれと云ふ處もない體の弱さからだつた。醫者は一體の營養をつけるやうに詞を残して、何時も無意味に聽診器を取つたやうな當惑顔で歸つて行つた。

すべての發育が遅れた。そして、秀夫は四つになつてやつと歩けるやうになつた。處が歩き出すとよく柱に頭をぶつかけたり、敷居につまづいて轉んだりするのだ。敷居につまづく處ではない、縁を踏み外して庭に落ちたりする事も少くなかつた。一度などはその爲めに縁先の踏石の角に後頭部をぶちつけて、深く傷づけた。その傷跡は小さな禿になつて長く残つてゐた。

「なんてまあそそつかしい子なんだらう……」と、母は掛念の眉を擧めた。

「そそつかしいよりも、頭でつかちだからですよ……」と、僕はまたそんな事を云つて笑つた。とに角、秀夫のよちよち歩く姿はどう見ても福助だつた。

で、秀夫が歩くやうになつた事は人並の赤んぼのやうにみんなの歡びの的とはならな

つた。却つてみんなに堪らない不安を抱かせた。何にぶつかるか、何時どんな處へ轉げ落ちるか、秀夫が歩き出すと、みんなはひやひやさせられた。そして、とうとう秀夫の爲めに子守を雇ふ事になつた。十六になる、みつと云ふのが秀夫に絶えず付き添つた。

それから暫く、食事の時には子供部屋でみつが秀夫を養つてやつてゐた。が、五つ六つの頃になると、秀夫は赤いひげ達磨の書かれた小さい茶碗を買つて貰つて、右手に短い箸を持ちながら、みんなの集る茶の間の食卓に著く事になつた。一體、僕の家では直径三尺餘の丸テエブルを家ぢゆうの者が取り圍んで、賑かに食事をするのが常だつた。で、一人前になつた末つ子の秀夫は母と一番下の妹の貞子の間に据ゑられた。

と、秀夫は茶碗をよくテエブルに置きそこなつて下に落した。お露碗に指先を突つ掛けて轉ばした。皿をかち合せて傷つけた。赤いひげ達磨の茶碗は一月にならし一遍宛買ひ換へなければならなかつた。とに角、秀夫が食卓に加はるやうになつてから、御飯を膝の上さらけこぼしたり、食卓ぢゆうにお露の洪水を起したりするのが、珍しい出来事ではな

くなつた。

「おおや、おや……」

「あら大變……」

さうした驚きの叫びを上げて、みんなは騒ぎ立てた。そして、そそつかし屋の秀夫に呆れた顔を、時には軽い憎しみを含めた不快の眼を向けるのであつた。

「ほんとにまあこの子は……」と、母は末つ子に對する特殊な愛を抱きながらも、さうした過失が重なつて行く内には、厳しい叱りの聲を秀夫に高めずにはゐなかつた。

が、そんな時、秀夫は如何にもいぢけきつた子供のやうな弱さで情氣てしまふ。そして、自分のしでかした過失が、如何にも思ひ掛けない出来事だつたやうに呆氣に取られた眼色を見せる。またそれが餘に大袈裟な結果になつたり、母達から厳しい顔附を見せられたりする、みじめな様子で泣き出してしまふ。時にはその表情や泣聲などが、その年恰好の子供に似合はない悔いや恥ぢの心持から來てゐるやうに見える事もあつた。いや、それで

なくとも、因循と云ひたいくらゐ溫和しい、また臆病小心とも云ひたいくらゐ物優しい秀夫の物ごしには、決してさうした過失を度重ねるやうな、なげやりな、がさつな、無頓著な、云ひ換へれば子供らしい天真爛漫の發露は感じられなかつた。寧ろ、子供としては如何にも性質の内氣な、舉動の靜かな秀夫がどうしてそんなそそつかしさをしでかすのか不思議な程だつた。實際、僕はさうした過失の後に秀夫の様子に見える一種の哀れつぽい感じを自分の身にまで感じながら、その過失の因よに就いて怪しんでみた事も時にはあつただ。

とに角、まだ五つ六つぐらゐの子供である秀夫の内に、僕は無邪氣、活潑、純眞、率直、云ふならば、すべての明るい子供らしさの乏しいのを感じずにはゐられなかつた。

「秀夫は長く生きない……」と、そんな暗い影さへ僕は秀夫の上に豫覺したのでつた。

六つか七つの頃になると、秀夫は繪本を見る興味を知つた。續いて姉達から片假名を讀み書きする事を教はつた。體質の上ではひどく成長の遅かつたに較べて、頭の成長はまた

ひどく早かつた。而も、秀夫はたつた一人で靜に子供部屋にこもつて、張出窓の板に凭つたり疊の上に寝そべつたりして、僕が子供の頃買ひせびつた鐵砲、サアベル、汽車、風船、鉛時計——さう云つたものとは反對に、武者繪、戰爭繪、幼年畫報、片假名書のお伽噺、雜記帳、鉛筆、繪具——さう云つたものを母にせびつて、それで一心に楽しんでゐるのだつた。

「秀夫、みんなで鬼ごつこするから來い……」原の方へ散歩に行かう……と、僕が誘つても、秀夫はそれにはしやき立つて飛び出してくるやうな子供ではなかつた。

僕の家はその頃大森の山手に住んでゐたので、芝生の庭も廣かつた。裏には大きな花畑があつた。花畑の眞中には深い池が堀つてあつて、鯉や鮒を放してあつた。夏の朝は其處に蓮の花が綺麗に咲いた。また僕は家の近くの、空氣の澄んだ、廣々とした郊外の夕方を、妹達と一緒に散歩するのが好んでゐた。が、秀夫はそんな事に興味を持たなかつた。そして、強ひるとしぶしぶみんなの跡に著いて來るのだつた。

或る晴れた秋の夕方だった、僕は妹達や秀夫を連れて、何時ものやうに散歩に出た。

「おい、今日は品川沖に軍艦が來てるぜ……」と、八景園近くの崖上に來た時、僕はかう云つて、美しく冴いだ遠くの海を指差した。

「あ、三艘だわ。煙出が一本のと、二本のが二艘ゐてよ。秀夫さん見える……」と、快活な二番目の妹の静子は直ぐに生き生きした聲で云つて、秀夫を振り返つた。

「何處、何處……」と、貞子は背延びした。

「ほら、あすこに松が生へてるでせう。あの向うよ。見えるでせう、三艘お船が……」と静子は貞子の背後から顔を両手で挟んで、ぐいと軍艦の方に向けてやつた。

「あ、見える見える。煙がもくもく出てるわ……」と、貞子は嬉しがつて手を叩いた。

「軍艦なんかゐないや……」と、秀夫は眼をきよろつかせて、ためつすがめつ探してゐる様子だつたが、やがて不平さうな聲で云つた。

「まあ、盲ね、秀夫さんは……」

「馬鹿だなあ、あすこだよ、あすこに見えるぢやないか……」と、僕は静子と一緒に秀夫をせせら笑つて見返つた。

「謔だ、謔だ、兄さんや姉さん達謔ついてるんだ……」と、秀夫は尙も沖の方を探りながら、ひがんだやうな聲で否定した。

「まあ變な人……」と、慶子は眼を秀夫の上に見張つて呟いた。

僕は秀夫の故意とねぢくれて云つてゐるやうな詞に不快な怒りを感じた。殴り著けてやりたいやうな苛々した氣持に襲はれた。が、さう云ひながらも、まだしきりに軍艦の影を探してゐる秀夫の一心な様子を見ると、それが瘦せた虚弱さうな體をしてゐるだけに、そんな手荒な氣持も崩折れてしまつた。そして、その様子がまた實際見附けきれずに失望してゐるらしかつた。「とに角、變な奴だ……」と、幽かな疑ひを感じながらも、その疑ひを突き詰めもせず僕はそのまま家へ歸つてしまつたのだつた。

それからまだ幾日も経たない或る日の午後だつたと覺えてゐるが、何でも曇つた、うそ

寒い晩秋の日だった。

「秀夫、そんな事をして寝てしまつちやいけませんよ……」と、子供部屋で、母の叱る聲が聞えた。

「寝てなんかゐないや……」と、それに續いて秀夫の聲がした。

「まあ、何してたの……」

「本読んでるんだ……」

「あら、そんな事をして本が読めるの、眼に毒ですよ。もつと顔を上げてお読みなさい。だいち、寝そべつて本を読んだりするものがありますか……」と、母の聲はさう續いて行つた。「そんなお行儀の悪い事をして讀むんなら、御本を取り上げてしまひますよ……」

それきり子供部屋は静かになつた。母は自分の居間へ歸つてしまつたらしく思はれた。僕は暫くして其處に忘れ物をして來た事を思ひ出して、子供部屋へ出掛けて行つた。と、秀夫は疊の上に突つ伏してゐた。

「おいおい、母さんに叱られたぢやないか。寝そべつてちやいけなないよ……」と、僕は咄嗟に云つた。秀夫はまだ顔を上げなかつた。近寄つて見ると、秀夫はお伽繪本の上に顔を伏せたまま啜り泣いてゐるのだつた。

「どうしたんだ……」と、僕はぎくりとして聲を掛けた。が、秀夫は答へなかつた。強ひて肩をゆすぶりながら譯を追求しようとする、その泣聲を高めるばかりだつた。聲を聞きつけてまた母が這入つて來た。妹達がそれに續いた。然し、秀夫はなかなか泣き止まうとしなかつた。母は掛念と疑惑の顔色を見せた。そして、しきりに宥めすかした。

「何故泣くの、何故泣くの……」と、母は仕舞におろおろ聲になつてしまつた。

「御本を取り上げちや厭やだ、厭やだ……」と、やがて秀夫は急に泣聲を高めながら云つた。僕は思はず母と顔を見合せた。

「取り上げやしない、さつきのは嘘よ……」と、母は優しく聲を低めて云つた。

「まあ何て神経の強い子だらうね……」と、暫く泣き止まない秀夫をちつと見詰めてゐた

母は僕を振り返つて小聲で囁いた。母の顔は血の色を喪つてゐた。

かうして月日が過ぎた。

その初めみんなから「そそつかし屋」にされてゐた秀夫は、何時となく「をかしな、可愛氣の無い子」にされてしまった。そして、如何にも溫和しい、物靜かな、弱々しい赤んぼだつた秀夫は、それが變にねぢくれて、陰氣な、臆病な、ひがみ易い、何よりも泣き沈む事に卑怯な避難所を見出すやうな子供になつてしまつた。全く、あの人前を憚るやうな妙におどおどした小狐のやうな眼色を見てゐると、のびのびした、快活な、やんちゃんながむしやらな子供に感じられる可愛らしさは何處にも感じられなかつた。

「末つ子だからお前が甘やかして育ててそくなつたんだ。見ろ、辰夫を初め今までの誰にもあんないぢけた性質の奴はなかつたぞ……」

「え、だから心配してゐるんですわ。けど、甘やかして育てるなんて……」

「然し、さうとでも云ふより……」

「いゝえ、違ひます。秀夫だつて叱る處は厳しく叱りますわ。そんなあなた、自分の子に分け隔てをつけるなんて、あたし……」

「ふん、自分ぢやさう思つてるかも知れん。だが現在……」

「現在どうだとおつしやるの……」

「現在、秀夫があんな妙な子供になつたとすりや、そりや責任はお前にあるんだぜ。己はこの頃外の爲事に忙しい。忙しいのでつい子供に對して父親の責任を果せなくなつた。それは己がよくない。が、それだけにお前は子供達の教養に心を配つてくれなきや困る。何しろ、あの年頃の子供は家の空氣次第で赤くも白くもなるんだからね。それがあんな、まるで日蔭者にでもなつて育つたやうな子供になるなんて……」

「ぢやあ、やつぱり私に罪があるつておつしやるの……」

「さうだ……」

三月の末の或る日の朝、父の書齋で父と母とがそんな口論を交してゐるのを、僕はそつ

と廊下で立ち聞きした。僕は、何か今までに経験した事のない一つの暗い影が家の中に蟻つて来たやうな気がした。胸がしきりに痛んだ。そして、「さうだ……」と、父がきつぱり云つた跡で母の幽かに啜り泣く聲が戸口を洩れて来た時、僕も涙ぐんでしまった。急に秀夫を劇しく叱つてみたいやうな衝動に迫られた。僕は直ぐに子供部屋へ急いで行つたのだつた。

「秀夫、秀夫……」と、僕は部屋の扉を開けて叫んだ。

と、秀夫は相變らず部屋の窓下の疊に腹這ひになつて、顔と本とを擦れ擦れにして何かに読み耽つてゐた。外の麗かに照つた春の太陽、長閑な暖かな春風、緑をふき始めた柔かな芝生——慶子達はその庭に出て、花の散りかかる櫻の樹の近くで、リボンを風に翻しながら生き生きと戯れ遊んでゐたのだつたが、秀夫にはそのすべてが何等の愉樂の對象にもならないらしかつた。一人ぼつちで、静かな家の中で、寂しさうにして、本に親しんでゐる——その姿は如何にも小さな世すね者のそれだつた。

「何故、外で姉さん達と一緒に遊ばないんだ……」と、僕は重ねて厳しく呶鳴つた。

秀夫はその血色の悪い顔をひよいと上げて、ちつと僕を見返つた。恐らく、その頃の秀夫にとつては家ちゆうの者のすべてが、殊に何時も厳しい冷たい顔を見せたがる僕が「怖い者」になつてゐたに違ひなかつた。で、僕はその瞬間にヒヤリと胸に觸るやうな、弱い者が却つて意地に刃を握り返して来たやうな、反抗的な、冷かな、堅い何物かをその視線の中に感じた。僕は思はずたじろめいた。劇しく叱り著けてやりたいやうな衝動は直ぐに弱められてしまつた。そして、詞を繼ぎ得ずがちつと立つてゐると、やがて冷かな、堅い何物かがその視線から消えて、急におどおどし出した眼の内に堪らなく恨めしげな表情を秀夫は浮べた。僕はとてもその表情に平氣で對抗して行く事は出来なかつた。

「好いお天氣だ。さ、庭で遊ばう……」と、僕は顔を反けながら、聲を抑へて云つた。

「厭やだ、厭やだ。庭で遊んだつて面白くなんかないや……」と、秀夫は直ぐにすねた聲で答へ返した。が、その時もう半分は涙聲になつてゐた。

「厭やだつて、ぢや本が一番面白いのかい……」と、僕は強ひて聲を和げた。
 「うん、面白い……」と、かう頷いた時、秀夫の顔は幾らか明るくなつた。聲にも張りがあつた。そして、やがてその小さな顔には自分の愉樂の境地を僕に認められた、満足らしい微笑が幽かに流れた。

が、僕は寂しい諦めに似た失望を感じた。そして、そのまま自分の部屋へ戻つてしまつた。

「だが、あんな氣質のまままで育つたらどんな人間になるだらう。それでなくとも、あの子供に似合はしくない讀書癖は、外出嫌ひは、運動不足は、きつと體の發育を阻んでしまふだらう。然し、自分にはどうする力もない。どう導いて行ける自信もない。それに何よりも堪らないのは、自分の胸から秀夫に對する兄としての愛がだんだん薄れて行く事だ。「一體どうすれば好いのか……」と、僕は暫く考へに耽つてゐた。と、また何知れぬ暗い影が秀夫の行手を包んでゐるやうに感じられた。そして、それは僕の氣持を堪らなく不安にし

た。

「然し、何が秀夫をあんな氣質、性癖に落してしまつたのだらう……」と、僕は不安を追ひ拂ひながら考へ直してみた。然し、それはどうにも僕に考へ及ばない事だつた。

秀夫が八つの四月が來た。

秀夫はその前から小學校入學の事には可成り興味を持つてゐるやうに思はれた。母が學帽や鞆や袴や靴を買つて渡した時、秀夫は珍らしい程嬉しげにこついた。また讀本や修身書はもう樂々と讀めた。「ブンキチハ、アサオキテ……」と、時々子供部屋から秀夫の聲が聞えた。

「學校で友達と遊ぶやうになつたら、きつとあの氣質もよくなるだらう。いちけた、卑屈な處も自然取れるに違ひない。何しろ好い鹽梅だ……」と、父も秀夫の小學校入學には希望を掛けて、喜んだ。

四月一日の朝、秀夫は貞子と一緒に母に伴はれて生き生きと家を出て行つた。僕もその

小さな、愛らしい學生姿を見ると、父の詞を思ひ出してほほ笑ますにはゐられなかつた。
 「どうだ、嬉しいだらう……」と、その日學校から歸つて來ると、僕は秀夫にかう云つた。
 秀夫はただ笑つて頷いた。

「お友達が澤山ゐたらう……」と、僕はまた云つた。秀夫はこれにも笑つて頷いた。
 僕は父の詞が確に實現されさうなのを喜んだ。また家ちゆうの者もそれを信じた。

「私は寺小屋に通つた事を思ひ出すがなう。ほんとに、今の子供は爲合せもんぢや……」
 と、祖母までが小學校教育を謳歌するのだつた。

小學校へ通ひ出してから秀夫の氣質に、また舉動に明るみが差して來た事は誰の眼にも
 感じられた。少くとも、朝學校へ出掛ける時の秀夫には因循さが消えた。またともすれば
 子供部屋に籠らうとする秀夫も、直ぐに何人か出來た「お友達」の訪問に妨げられて、庭
 へ出遊ぶ機会が多くなつた。そして、とも角も家以外の空氣に觸れる機会が度重るにつれ
 て、まだ其處に内氣な、小心な、いぢけた過去の姿は十分に消えないにしても、子供らし

い至純さ、無邪氣さが次第に蘇つて來た。詞附さへ元氣になつた。また血色も秀れて見え
 るやうになつた。

「まあ、今日は相撲を取つて遊んでゐましたのよ……」と、或る夕方母は何か思掛ない物
 を見附け出したやうな、誇張した表情を浮べて父に聲掛けたのであつた。

「何、相撲……」と、父も眼を見張つて、朗かに笑ひ出した。

僕もそれを傍らで聞きながら一緒になつて笑つた。全く、秀夫と相撲などと云ふ取り合
 せは家の者全體に餘に不思議な、寧ろ滑稽な氣持さへ感じさせるものだつた。が、それは
 事實だつた。事實と思ふと同時に、みんなはその奥に秀夫がさう展開して來た事に對する
 深い歡びを見出した。家ちゆうに或る和氣が漲つて來たのは云ふまでもなかつた。

五月が來た。その或る日の事だつた。秀夫は受持教師からの保證人呼出の手紙を持つて
 來た。「秀夫様の事に就き御相談申上度……」と、云ふやうな文面だつた。

「お前、何か悪い事をしやしないかい……」と、僕は軽いからかひ氣味で何氣なく秀夫に

さう云つた。

「謔だ……」と、さう云つてその時ひよいと僕を見上げた秀夫の眼に、僕は我知らずはつとした。それはあの眼だつた、あの冷かな、堅い何物かを持った眼だつた。僕は自分の不用意な詞を悔いずにはゐられなかつた。そして、またおどおどし出したその眼附を怪しんで見詰めた。

翌日、僕は學校へ行つた。受持教師は師範出らしい、銀縁眼鏡を掛けた、温良な顔立の若い男だつた。

「いえ、別に御品行や御成績に就いての御相談では御座いませませんが、實は、秀夫さんはお眼が悪いんぢや御座いますまいか。と申すのは、讀本をお讀ませするとすらすらお讀みになる。處が、黒板に書いた字はどうもはつきりお讀めになれないんですね。で、若しや近眼と申すやうな……」と、彼は如何にも謙抑な態度でかう云つた。

「近眼……」と、僕は教師の眼鏡を見ながら思はずさう聞き返したが、その咄嗟にぎくり

と總身を刺し通すやうな衝撃シヨツクを感じた。と同時に、全く不思議な事には僕の頭の中を秀夫の生立のすべての経過がまさまさと掠めて行つたのだつた。

「何かお心當りでも……」と、教師はおづおづと僕の衝撃シヨツクに打たれた顔を窺つた。

「いいえ、とんだ事です。ちつとも心附かなかつた事です……」と、僕は故意カゴと否定しながら云つた。

「成程、さうでしたか、とに角、する分大きく書いて上げると少しはお見えになるやうですがね。若しやと考へますので、醫者の御診察をお受けになつたらどうでせう。近眼でゐながら眼鏡を用ゐないと性格にまで影響しますさうですから……」と、教師は自分の事を頭にはつきり意識したやうに顔を赧らめて云つた。

それから何分か後には、僕はその若い教師からまるで大きな光明を與へられたやうな氣持で、家路を辿つた。僕は確に興奮してゐた。そして、何かかう譯の分らない嬉しさが心の底から込み上げてくるのだつた。

「さうだ、これがすべてだ。全くすべてだ。だが、何と云ふ可哀想な事だらう、何と云ふ怖ろしい事だらう……」と、僕は秀夫の今までの事を考へてみて、實際頭を何かによつけてしまひたいやうな感動に捉はれてゐたのだつた。

その翌日、それは細い霧雨の日だつたが、秀夫は母に伴はれて京橋の叔父の病院へ出掛けて行つた。その叔父の診察を受けて、十二度の近眼鏡をあゝの顔に掛けて、秀夫が家に歸つて來た時の事、そして、その秀夫の姿を見た時の僕の氣持——僕はそれを到底平氣な顔で喋舌る事は出來ない。

「何でも見える、何でも見える、遠くが見える、はつきり見える。綺麗だ綺麗だ。や、向うの電信柱がよく見える。樹の葉が一つ一つ見える。綺麗だ綺麗だ……」と、秀夫は氣違ひのやうにはしやぎ立つて、ぐるぐるぐるぐるあつちこつちを見て歩いてゐる。殊に初夏の若葉の色が雨に冴えてゐる庭の遠景色には我を忘れて見入つてゐるのだつた。僕はその聲が耳に著く度に、その有頂天な姿が眼に入る度に、まるで體がだんだん化石になつて行

くやうな氣持がした。

「そりやあね、新橋から大森までくる間、汽車の中の様子つたら……」と、母はもう涙ぐむ處を通り越して、氣の抜けたやうな聲でかう繰り返してゐるのだつた。

「お前、どうして今まで遠くがはつきり見えなかつて云はなかつたんだ……」と、僕は秀夫に云つた。僕の聲は無意識に顫へてゐた。

「だつて、遠くはあんなものと思つてたんだ……」と、秀夫は事もなげに云つて笑つた。

僕はその晩、秀夫の事が抑へても抑へても思ひ出されて、どうしても寝つく事が出來なかつた。そして、戸外の静かな夜の雨音が一そう僕の眠を妨げた。

梅雨が近かつた。その雨は三日程續いて晴れなかつた。その間に家ちゆうの者は眼に映るすべての物象に好奇の念をそられて、新鮮な愉樂に耽つてゐる秀夫を見た。そして、とに角秀夫は小學校に通ふことと同時に、この新しい出來事に依つて明かにその氣質や舉動に變化を見せ始めた。少くとも、すべてにはきはきした、生き生きした處が加はつて來

た。僕はその變化のまさまさしさに驚くと同時に、眼のよさの幸福——そんな事を今更に考へずにはゐられなかつた。

續いた雨は四日目に晴れた。初夏の輝かしく澄み渡つた空は淡紅の夕榮えに暮れて、靜かな夜が來た。僕は妹達や秀夫を連れて、夕食後海岸の方へ散歩に出掛けた。僕や妹達の心持が今までの秀夫を伴ふ散歩の或るこ、だ、は、り、から解放されてゐたのは云ふまでもない。みんなは海を越えてくる靜かな風に吹かれながら、はしやいだ氣持になつてゐた。僕は妹達が揃つて唄ふ歌聲に耳を傾けながら、自分自身も初夏の夜の空氣のすがすがしさを楽しんでゐた。

「あら、天の河がよく見えるわね……」と、海岸の波打際に來た時、慶子がかう云つて空を見上げた。それはまるで水銀を撒き散らしたやうに輝いて流れてゐた。

「まあ、何て綺麗でせう……」と、靜子が同時に聲を上げた。

「や、見える見える……」と、秀夫は姉達の聲に氣附いてまじまじと眼鏡越しに空を見上げてゐたが、急に嬉しさに我を忘れた聲でかう叫んだ。そして、體を一廻りさせて夜の空を見渡すと、「素敵々々、あつちにもこつちにも光つてるぞ。綺麗だなあ……」と、續けて云つて、感動しきつた様子で佇んでしまつたのだつた。

「兄さん、あれが星なの……」

「さうだ、あれが星さ。きつとお前は今まで何にも見えなかつたんだね。ほら御覽、あすこに一、二、三……と、七つ星があるだらう。あれが北斗七星。それから、その上の方に少し大きくびかびか光つてるのが、北極星つて云ふんだ……」と、僕は知つてる限りの星を數へて秀夫に教へてやつた。秀夫は劇しい好奇心に體をしゃつちよこ張らせながら、一々の星に眼を据ゑて眺めてゐた。

「一體、星つて何……」

「星つて何つて困つたな。さうさ、まづ地球みたいな泥や石や鐵なんかの塊さ……」

「そんな物の塊？　ぢやどうして光るの……」

「それはね、太陽の光が映るからさ……」

「だって、夜、太陽は見えないぢやないの……」

「うん、星からは見えるんだよ……」

「ぢや、星に人間がある……」

「困つたな。ゐるのもあるつて云ふよ……」

「ぢやあ、星の人間はあんな光つた物の上にて熱くないの、それに星つて空から何處へも落つこちないのね……」

「うむ……」

僕は海岸から家へ歸る道々、秀夫のかうした質問にすっかり弱らされた。而も、僕がそのどの質問にもはつきりした、子供に分るやうな答を與へきれないので、秀夫はその度毎に小首を傾けて空を見上げて、考へ込んでゐた。僕はその自分の詞の曖昧さ不確實さが何となく不安だつた。そして、それが子供の純な、正直な心の上に何かの濁りを與へやしない

かを考へた。が、星の發見——それはとに角、好奇心の鋭い、空想の豊かな秀夫の胸に堪らない美しさと、不思議さと、興味とを與へたらしかつた。家へ歸つても、秀夫は縁先に出て、庭の向うの黒い森の上に光る星影を一心に見詰めて、しきりに考へ込んでゐた。

その翌晩も、翌々晩も秀夫は夢中になつて星の觀察に耽つてゐた。そして、子供の限らない好奇心と空想力から生れ出るあらゆる疑ひを、家ぢゆうの者に向つて解決を迫るのであつた。が、誰もがその疑ひに十分の解決を與へ得ないだけに、一そう秀夫の星に對する好奇心と空想力は強められて行つた。秀夫はひたすらに星の出る夜を待つた。雨の夜、曇つた夜——その時秀夫の失望は深かつた。家ぢゆうの者は嘗て讀書癖で病的になつてゐた秀夫の姿を、再び星に對する傾倒で病的になつた秀夫の内に見出したのであつた。誰も心に新たな不安が何時となく意識されずにはゐなかつた。

「兄さん、星が落つこつた、星が落つこつた……」と、或る夜であつた。また庭に出て星の觀察に耽つてゐたらしい秀夫は、かう云つて僕の部屋へ駆け込んで來たのだ。僕は息を

切らしてゐる秀夫を見た。その顔は新しい發見に對する歡びと驚きとでこはばり、眼鏡の影には神経質な眼がきよろきよろ光つてゐた。僕はその血色がまた昔のやうな冷たい蒼白さに歸つてしまつた事を、ふと認めずにはゐられなかつた。

「どうしたんだつて……」と、驚いて僕は訊き返した。

「さつき空を見てたら、あつちの方で星が花火みたいにすつと光つて落つこつたんですよ。僕はこはかつたけれど、面白かつた。あの星何處へ落つこつたんでせうね、兄さん……」と、秀夫は息せいて、眼を無氣味に輝かしながら、僕の顔を覗き込んだ。僕は思はずちり毛をふるつた。

「ね、兄さん、あの星地球へ落つこつて來ないの……」と、また秀夫は病的なひつつこさで僕に質問をしかけ始めたのであつた。とに角、秀夫は綺麗に光つて動かない物と信じてゐた星の中にその夜ふと流星を見出したのに違ひなかつた。そして、それが燃え盛つてゐる秀夫の好奇心に油を注ぎ、また星に對する異様な興味と疑惑の心を一そう高めてしまつた。

たのであつた。僕は不安を通り越して恐ろしくなつた。秀夫の眼、聲、顔色——それは恰も *ghastly pale* と云ふ色に包まれてでもゐるやうな無氣味さで僕に迫つて來たのであつた。而も、その色の中に小さな黒い瞳が堪らない執拗さで光り、小さな赤い唇が不思議な饒舌さで顫へてゐるのであつた。

「ねえ兄さん、あの星地球へ落つこちないの、え、落つこちないの。落つこちなきやあ何處へ落ちるの……」と、秀夫は尙も僕にねちねちと返答をせがむのであつた。

「ね、何處へ落ちるのよう……」と、ちつと口を噤んで見守つてゐる僕の眼を反對にちつと見返して、秀夫が再びかう云つた時、僕はもう堪へきれなかつた。僕の唇は自然にぶる戦き出した。

「そんな馬鹿な、もううるさいよつ……」と、僕は怒りの心持よりも自分の胸をぐいぐい締め著けてくる恐怖の念を胡麻化さうとして、無理に聲を荒ららげて呶鳴りつけた。

「だつて星は……」と、秀夫は僕の聲に恨めしげな視線を返して、また云つた。

「知らないつたら、しつこい奴だな。もうあつちへ行けつ、うるさい……」と、僕はもうとても自分を抑へつける事が出来なくなつて、調子に任せてかう脅かしつけた

と、秀夫は吸り泣き出した。寂しげな、堪らなく陰鬱な、低いその泣聲は静かな夜の部屋の空気にしみ渡つた。僕は身動きも出来なかつた。そして、秀夫の姿から顔を反けてゐた。やがて、秀夫は涙の爲めに血走つた眼を上げて、ひよいと僕の顔を見た。泣聲はまた高くなつた。僕は眼をつぶつた。暫くして氣が附くと、秀夫の姿はもう部屋に見えなかつた。

「秀夫は解決すべきものを解決しようとして、自分に色々な疑問を持つてくるのだ。秀夫は正しいのだ。馬鹿ではないのだ、それを満足させる事の出来ない自分が悪いのだ……」と、僕はそんな事を考へないではゐられなかつた。

それからまた二三日曇つた日と、雨の日が重なつた。秀夫は何時も陰鬱な顔附を浮べてゐた。物ごしのすべでも沈んでゐた。が、晴れの日が再び來た時、そして、眞珠をちりば

めたやうな星空が仰がれる夜が來た時、秀夫は急に生き生きした少年に返つた。秀夫は星の光を浴びるとその氣質を一變させられる少年のやうに思はれた。夜が暮れた時、すつかり夜の暗さが地上を覆つた時、秀夫はまた庭の芝生の上に立つてゐた。

「また庭に出てゐるな……」と、父が眉を顰めながら云つた。

「ええ、もう爲方ありませんわ。何と云つても聴かないんですもの……」と、母は投げやるやうに云つた。

空を見上げて夢遊病者のやうに庭を歩き廻つてゐた秀夫は、やがて家ぢゆうの者達の眼を恐れるやうにして、裏の花畑の方へ歩いて行つた。

「あんまり遅くまでそんな事をしてると、體に悪いぞ……」と、僕は遠くから聲を掛けたが、秀夫はそれには耳も假さないやうに、一心に空を見上げながら駈け出して行つた。

……………

秀夫の死體が花畑の池の中に浮び上つたのは、その夜、もう黎明に東の空が幽かに赤ら

む頃の事だつた。すべての手當は及ばなかつた。空しく郊外の其處此處を探し歩いた母は喪心しさうになつた。秀夫は空を見上げながら夢中になつて歩き廻つてゐる内に、其處へ落ち込んだに違ひない。水の面に仰向いて浮んでゐたその顔の上には、數知れない曉の星が美しい、愛らしい、神祕な、そして、セクテイブseductiveな光を薄めて、靜に微笑してゐた。

——星はとうとう秀夫を殺したのだつた。

かう云つて、N君は深く吐息づいた。その澄んだ、美しい眼は涙に曇つてゐた。

死

神

九年二月作

その頃辻車引だつた私が赤坂新町の親方の家を出たのは、その晩も、もう十一時を廻つた時分でした。

「大事におしよ……」と、流石に女らしい憐れみを見せて背後から聲かけたお女房さんに「へ、有難う……」と、ひよいと門口で頭は下げましたが、心の内では「永年の店子を親方もあんまり無慈悲だ……」と、泣きたいやうな、恨めしいやうな氣持で、云ひ返してゐたのでした。

「だが、無理もない。みんな己の不運だ……」と、板戸を降してひつそりした通へ出ると脚氣で水氣すゐきの來た足を引き摺り引き摺り、直ぐに私はかう考へ直しました。が、何しろ丸たん棒まるぼうみたいに重い足を、のけぞつた、無體な格好で運んで行くんですから、小半町も行かない内に額には脂汗をかく、息はせいてくる、その苦患くげんな事つたらありません。

とに角、身に覺えの無かつた脚氣が急に起つて來て、私が碌々稼ぎに出る事も出来なくなつてから丁度三月餘り經つてゐました。それが醫者の世話も受けきれず、また永田町の

細井様のお邸裏の棟割長屋に、七十になるお袋と、長男の新作を産んだばかりの寝ついた家内を抱へて、私が働かなかつた分には一家の口が乾上らうと云ふ譯で、無理に無理を構へた擧句病氣が募つて、とうとう歩くのさへ不自由になつたのは、その一月程前からでした。處で、無論溜置きがあらう筈もなく、若い時分に國で納所坊主の勤めが厭やになつて東京へ飛び出し、結句車引なんかに落ちぶれてしまつたんですから、頼みにする身寄なんて一人もありません。で、とどのつまり親方の處へ無心に行かねばならぬ羽目になつたんです。

もう五年も前からさんざん世話になつてゐる。それにまた借金の心配を掛ける。その借金が病氣の三月程の間に、借り車の損料に積り積つた何やかやで三十圓近くにもなつてゐましたらうか。金には自分でも精一杯綺麗に振舞つてゐましたし、もともと馬鹿正直で、曲つた事が嫌ひで、勝氣な性分の私ですから、ただ金を借りる事さへ厭やだつたんです。が、ゐ食ひの日が重なつて行く内には、家ぢゆう着の身着のままになつて、もう世帯道具

の、それも初めつから碌な物一つあつた譯ではなく、とうとう鍋釜の隅まで無くなしてしまつて、厭やでも應でも、また時には苦い顔も向けられる辛さを忍んでも、やつぱり親方に頼むより外は無かつたんです。

その日の夕方でした。滞つた家賃の六圓餘りを大家が催促に来て、みんな駄目なら半分でも入れる、入れられなきやあ立ち退けと迫られました。それが、何度もの事なんで返す詞もありません。と云つて立ち退く譯にも行かず、とうとうまたせつば詰つて、不自由な足を親方の家へ運んだんです。が、親方も流石に強面こはもてでした。

「己んどこだつて金のなる木がある譯ぢやねえ、かう見えても世帯は火の車なんだ。まあ今までの處は爲方がねえ帳消にしてやるが、さう止度無しに借りに來られては、こつちの口が乾上らあ。邪慳なやうだが、これでもうきつぱりお斷りだぜ……」と、親方は應帝いんてんの紙入から皺くちやな一圓札を掴み上げて、私の前にボンと投げ出しました。

「濟みません……」と、實はたつた一圓と、その札をちらと横目で見ると思つたんですが、

隣りの溜り部屋にゐる朋輩の氣も兼ねて、疊の目がもやつくまでに頭を下げました。全く、きつぱり断られた上に、借りつけの車も外の仲間に廻したからと云ひ渡された時には「かうして頭を下げにくるのは病氣が因なんだ。慈悲の掛けやうもあらう、あんまり没義道だ……」と、ちよつとの間鬼のやうに見えた親方の顔を口惜しい眼附で見返しました。永い間厄介を掛けたばかりか前の帳消さへして貰つたんです。それを思ふともう恨み處か、お禮を云はなければならぬ。私は思はず首をうなだれて、溜息づいてしまひました。

「だが、これからどうする。このたつた一圓で……」と、歩きながら袂の一圓札を汗ばんだ手で、はと抑へてみて、かう考へ出した時、私ははつと思ひました。今更、體の悪い車引のすたり者なんかに、なまなか雇はれる爲事なんか見附かるものではなし、大家の催促は家にかんばつてしまへば當座は濟む事、ただ、一圓のお金で一家四人が幾日食べて行けるか知ら、てもなく先は饑ゑ死に——などと、ひつそりした通の事なんかすつかり忘れて

とつかうつ考へ考へ歩いてゐる内に、急に自分の行末がまつ暗闇になつてしまつたやうな氣がして來ました。

とに角、十五六年前の話なんですから、今程の盛りやうはありませんでしたが、親方の家から田町三丁目四丁目と抜けて、山王下の日吉橋にかかるまで、それがあの藝者屋町なんです。丁度日露戦争の後で景氣の潮時だつたもんですから、もう十二時近いと云ふのに三味線や、陽氣な唄や、はしやいだ笑聲なんか、そのまつ暗闇になつた氣持の處へ、いきなり耳に著いて來たもんです。それに初夏時分の事で、まだ處々雨戸を締めない料理屋の明るい障子には女の踊つてゐる影までが映つてゐます。で、初めはまるで狐に抓まれたやうな氣持でぼんやり歩いてましたが、あんまり、あんまり其處のけじめがひど過ぎます。何時の間にか、ひとりでにぼろぼろ涙が落つこつて來ました。

けれども、別にあんなにして騒いでみたいとか、あんな金があつたらなどと、きたないさもしい考へを起したのぢやありません。かう、よごれくさつた袷に兵兒帶姿で、草履を

突つ掛け突つ掛け、えつちおつちと體の拍子を取りながら鈍くさく歩いて行く、その上にもう胸の中がすつかり闇になつてしまつてゐる私を、滅相もなく自分とは掛け離れた世の中がせせら笑ふやうに見降してゐる。全く、そんな氣がしたんです。すると、その歩いてゐる地面がどんと深い谷底になつて、その底からたつた一人で、及びもつかない高みにある明るい空をぼんやり見上げてゐるやうな、何とも云へない心細い、寂しい、頼りない氣持になつて來ました。

「ああ情無い……」と、爲方がありません、弱みに弱みのつけ込んでくる身のせつなさに溜息づいて、うなだれて首をひよいと上げると、何時の間にか其處は日吉橋で、いきなり濠の腐つた水の匂ひがむつと小鼻に衝き上げて來ました。と一緒に、急に暗く、急にひっそりして來たあたりの酒倉のやうな空氣の中に、橋板に引き摺る自分の重い足音がぎしつぎしつと染み渡るんです。何となく厭やあな氣持になつて、ぞつと顫へてしまひました。

處が、その晩がまた雨もやひの、そよとの風も無い五月闇でした。それにもう夜が更け

きつたものですから、あたりも沈んでゐます。で、その邊へ來ると、まるでかうぬるま湯の中でも歩いてゐるやうに厭やに生温い、咽喉口にぬうつと詰まつてくるやうな厚ぼつた空氣が體ぢゆうを包んで、その中へ神經がもやもやとぼやかされて行くやうな氣がします。況して、水氣で膝から下はすつかり感が無くなつてゐるんですから、疲れと一緒に體はまるで不死身のやうで、氣だけが變に鋭く冴えてゐました。

で、その橋を渡りながら見上げると、正面には山玉様の丘がおつかぶさるやうにぬつと聳えて、それがまた若葉のすつかり出きつた時分の事なんですから、こんもりした森の茂みがまるで焦茶の毛布地かなんかみたいに中空へまつ暗く脹れ上つてゐるんです。そして、眼の先の丘の登り口に薄暗い安全燈が一つ、堪らなく陰氣に光つてゐました。勿論、ガスや電燈なんてそんな氣の利いた物は立つてはゐません。外濠の電車だつてまだ敷けてはゐなかつた頃ですからね。で、何時も一日稼いだ俵を親方の處へ返しちやあ歩き慣れた家への近道、何しろ何時も刻限が刻限ですからあの暗がりの寂しい道を滅多に人の歩いてゐる

事は無いんですが、それが、その晩は妙に心細くなつてなかなか歩き込んで行けません。たださへ遅い足が何となくすくんで、思はずもう一遍振り返ると、橋向うの軒燈の灯がポツリポツリと厭やに遠くになつて見えるばかり、赤坂臺の兵隊屋敷だつて眞黒な岩屏風のやうな圖體をいかつく空に霞ませてゐるだけで、窓に明りの一つ差しちやありませんでした。

「だが、一體まあこの先、どうすりあ好いんだ……」と、やつぱり氣になる行先の事が急にまた胸を衝いて来て、それでもとうとうあの暗がり道を左へ取つて、右側は山玉様の森、左側は榎本様のお邸の高い石崖続き、その間を考へ考へ歩き出したんです。

さて、歩き出してはみましたが、現在の身の振りを、いいえ、もう直ぐにも迫つてゐるお米の心配をと突き詰めてくると、おちおち歩く氣持もなくなります。それに足は足でせう。一足行つては休み、一足行つては考へ、あすこがまただんだらの小坂道だけに息は弾んでくる、弱つてゐる心臓の動悸はひどく高まつてくる、もうそれだけでさへやりきれな

いのに、色んな苦しい思ひがああもかうもと頭の中にこんがらかつてくるんですから、い氣持や、泣くところなんかを通り越して、その頭が酒の惡酔でも來たやうに妙な工合にかあつとなつて來ました。

全く、洗ひさらしの貧乏も貧乏、どうしてああまで食ひ詰めたものかと今でも思ひますが、ある金と云やあ親方から貰つたその一圓札に、袂糞に交つてたつた銅貨が三つ四つ、それも前の晩、私の著てゐる箭餅蒲團を質入れして三十錢程に廻して貰つた残りなんです。歸つてみたつて、崖下の暗つぽい、じめじめした四疊半に三疊の芥溜みたいな處へ、人間のくさり物のやうな一家四人がくすぶつてゐるんですから、お金にするやうな物一つ無い分には、その一回の幾らかをせめても家賃の分割りに入れた後、どうにも動きの取れる筈はありません。さあそれから先は殘飯を一かたけ買つて來ようつたつて、そのお金を産む分別なんかつきやあしません。お袋はよぼよぼですし、家内は産後ぢやあるし、それに平生から丈夫でないんで碌な手内職すら出來なかつたんですから……。

「己も三十面さげて……」と、かう思ひ出してくると、今までが身一つ、氣の強みだけで一家を支へてゐた私なだけに、病からとは云ひながら、自分の甲斐なさが急に口惜しくなつて來ました。で、何だかかう利かない體までがじれつたくなつて、いきなり足を地面へどんと踏んづけてしまひました。

と、その拍子に、夜露に濕つた堅い土のはね返りが、づうんと兩股へ應へたもんです。そして、それが半分だけしか自分の物だと思へない腰から上へ、厭やつと云ふ程響きましてね。ひよろひよるとなつたんです。それを思はず踏み應へて立ち止まりましたが、氣が鎮まると、自分ながら氣違ひ染みた所業がひよいと馬鹿々々しくなりました。が、その泣き笑ひの氣持の後から、心細さ、寂しさ、悲しさと云つたやうな思ひがもつれ合つて、また一度に胸の底へ衝き上げて來ました。

すると、臉がじはじはと熱くなる。眼が暗闇の中にとろけてしまつたやうに霞んでくる。そして、頭の中の血が不意に煮え立つて來たやうな氣がしたと思ふと、體ぢゆうの感がす

つかりぼやけてしまつて、もう何を考へてゐるんだか、何處をほつつき歩いてゐるんだかさつぱり譯が分らなくなつてしまひました。ほんとに、今までの重たい足さへ宙に浮いたやうな心持になつたんです。さあそれでも、日吉町から永田町二丁目坂下の交番まで三丁餘りの道を小半分も來てゐたでせうか。何しろ鈍つくさい足で歩いてゐるんですからね。

處である道はだらだらと登つて、まただらだらと下るやうになつてゐる。下りにかかれば交番の赤電氣が見える筈ですから、何でもまだ登りきつた處までは行つてなかつたんですね。さ、それこそ鼻を抓まれても分らないまつ暗闇、左手はすつと三四間もある高い石崖、それに喰ひつくやうに右手の山玉様の丘の樹の枝が延びかかつてゐる。その間にやつと小溝程の廣さに見える夜の空がおはぐろを溶したやうに暗んでゐる。家は無し、人通は無し、明りは無し、しいんとした中に電信柱が地から生えたやうにぬつと立つてゐるのがそれと見えるだけなんです……。

すると、どうでせう、その山玉様の丘の蔭からいきなりひよいと飛び出て來た人影があ

ります。若い女ですね。多分鼠地のセルでも著てたんでせう。それが白つぽい帯でお腹の處がくびれて、丁度お月様の中に住む兎の持つ杵みたいな恰好に見える。飛び出たかと思ふと、足元の白足袋をふはつとさせて、すつと近寄つて來ました。と、夜目にもお白粉のまつ白な顔をひさし髪の下から延ばして、私の顔を二三尺の處でちいつと覗き込んだんです。途端に、女の體附は急にくたくと崩れました。そして、あわてたやうに私の來た方の道へ駆け出しました。それが背後を思はず振り返つた時、背中の帯のお太鼓が闇の中にポツと白く私の眼に映つたつきり、もう影は消えておりました。

正氣である何時もなら、もう度膽を抜かれて、ちり毛を振つて、まつ青になつて逃げ出す處でせう。いや、悪くすると眼ぐらゐ廻し兼ねなかつたんです。が、何しろ變に取りのぼせて感が鈍つてゐて、自分自身、人間なんだか幽霊なんだかさつぱり得體の知れない氣持でゐた途端なんですから、ぬうつと覗き込まれた時の女の白茶けた、さらさらと乾いたやうな顔色がぼんやり眼先に残つただけ、そのまま坂を登り詰めた處で、足を引き摺り引

き摺り下りに掛かつたんです。

ふと前を見ると、何時の間にか靄でもかかつて來たのか、遠くの方にぼやけた軒燈の灯が一つ見えました。それがまた大きくなつたり小さくなつたりして、くるくる廻つてゐるやうな氣がするんです。ちつと見詰めました。すると、今度は自分の眼がくるくる廻り出したやうな、吐氣のつきさうな氣持がする。と、不意に自分の家のささくれた安疊の、べつとりと濕つた踏み心持が足の裏に通つて來て、暗つぽい石油ランプのとぼつたその下に坐つてゐるお袋の、土色氣の、瘦せこけた、皺だらけの顔のまん中の、厭やにどんよりした眼が見えて來たんです。同時に、何かが自分をぐいと抑へたやうな氣がして、私は思はず立ち止まつてしまひました。

家へ歸る氣持がふつと消えたのはその途端でした。そして、そのまままつ暗な道のまん中に佇んで、吸はれるやうに森の闇を見据ゑてゐました。が、何にも見えないんです。見えないけれども、やつぱりちいつと見据ゑてゐる。ゐる内に、頭がポオツと消えてなくな

つたやうな気がして、その中にまるで剃刀の刃のやうに鋭い、はつきりした影がひよいと差したかと思ふと、私はもう全くその影だけに引かれて、夢中になつて丘の闇へ登り始めたんです。草の根に足を掛けさせたり、樹の幹に手首を掛けさせたりしたのも、その影です。私の感はもう全くありません。ただ、その頭の何處かにしつかり喰ひついてゐる影が舵のやうに私を操つて、ぐんぐん引き摺つて行つたんです。

何時の間にか、その私は可成り急ななぞ、へになつてゐる丘の中途に立つてゐる櫻の木の下の方へ下つてゐる太い枝を見付けました。そして、自分の兵兒帯を解く、何度か引つ掛けそくなつてやつとそれを枝へ掛ける。きゆうつと結目を拵へる。その結目を上の方にするするとすり上げる。ぐいと一度引つ張つてみて、それを輪にする。その輪へ前にのめりさうになる體を堪へながら首つ玉をすぼりと填める。填めた處でがつがつしながら、龍膽の一ぱい生えた地面をぐつとつま先で蹴つて、飛び込むやうに前へ身を投げ出してしまつたんです。ぶらつと下がつた足が土に七八寸……。

「あつ……」と、思つたのは咄嗟で、咽喉がぐぐつと鳴る。首がいきなり二三尺にも筋張る。咽喉佛の骨がポキンと碎ける。と、體が輪の處で二つに切れて、胸が鐵板で挟まれたやうに堪らなく苦しくなる。一方、首から上は一時にどつとくづ湯でも注ぎ込まれたやうに燃え出して、鼓膜が汽車に乗つて鐵橋を通つて行く。顔の皮は瞬く間もなくまるで堅ゴムのやうに硬張つてしまふ。手と足とがとても堪へられない力でビリビリ顫へ出したんです。

「苦しいつ……」と、嗚鳴らうとしましたが、聲は出ません。

「降してくれつ……」と、助けを呼ばうとしましたが、聲は出ません。

「しまつた……」と、はつきり自分に返つたのは、その途端です。そして、我知らず眼を開けた時、小半町下の猿が池の水が安全燈にぼんやり光つてゐるのがひよいと映りました。と、劇しい後悔と命を助からうとする一所懸命な氣持が槍先に突き上げられたやうに、胸を打ちました。苦しさから逃げようとして體をいも蟲のやうにあがきました。地面へ足を

踏んまへようとして、夢中で足をじたばたさせました。両手首で死に物狂ひに輪をへぎ取らうとしました。が、それが二三十秒も続いたかと思ふ内に、頭がまるで石になつたやうな氣持がして、それと一緒に手足の指先から感が體のまん中の方へすうつと消えて行くんです。そして、動かさうとしても體ぢゆうがしびれたやうに利かなくなり、忽ち耳の奥もしいんと靜になつてしまひました。ただ、氣だけがはつきり冴え残つて、みじめな程一心に何處かへ逃げて行かうとしてゐました。

が、する内にその氣さへまるで湯毛の立つやうに消えてしまつて、胸の苦しさも、顔の熱さも、くびれた輪の痛さも忘れたやうになりました。そして、それこそ體が樂々と宙に浮いてゐるやうな、何とも云へない好い氣持になつて、夢見心地にその體がすいすいと空に舞ひ昇つて行くぢやありませんか。それがまた、かう酒にでも酔つてうつらうつらと寢入りかけた時のやうな、と思ふと、その譯の分らない氣持好きさが下腹の處へきゆうと固まつてしまひました。

「う、う、う……」と、思はず體がのけぞつたやうな氣がした跡、プツンと絲が切れたやうに今までの事柄がすつかり消えてしまつたんです。

と、つぶつた眼の遠く向うに、ぱつと眼の覺めるやうな明るい、綺麗な、廣々とした野山の景色、それがどうも私の子供時分に見慣れた國の春景色に似てゐたんですが、とに角水色の晴れた空、墨繪のやうな織り重なつた山、その下に青々とした野原が擴がつてゐる。そして、そのまん中に何とも云へない澄んだ色の眞赤な花の一かたまりがちらつと見えました……。

景色がふつと消えたのと、自分がポツと消えたのと、それつきり何にも分らなくなつてしまひました。

……
……

お腹が途方もない遠くで揺れてゐる。

手の指先にチリチリ、チリチリと何かが觸る。

ひそひそと二三町先でしてゐるやうな人の話聲がする。

口が自分ながらをかしい程顔から遠くへ離れて、その中で幽かにお酒のやうな匂ひがする。

そして、それがだんだん自分の近くへ寄つてくる。頭のうしろに何か柔かな手應へがする。體が間を置いてぐいぐいと何かに動かされてゐる。咽喉のどがもやもやと熱いやうな氣持がする。胸の處が軽く脹れたり縮んだりする。どつちかの手首が何かに握られてゐる。眼の處がボツと明るい。譯の分らない物音がまだはつきり聞き取れない遠くでがさごそとする。と、暫くすると、手足の指先が自分の物になつたやうな氣持が不意にしたんです。したかと思ふと、その氣持が見る見る内に體ぢゆうに擴がつて行くやうに思へて來ました。

「いや、もう一足遅れると……」

「なる程、さうですか……」

「もう大丈夫でせうな……」

「大丈夫ですとも、脈が幽かに打つて來たやうです……」

「巧く行つたねえ、君……」

「うん、巧く行つた……」

「さうです。巧く行きました。大分體に温みが來たやうです。好いお人助けで……」

「どう致して。實を申すと、この頃どうもあの境内でしきりに男女の密會があるんですな。で、風俗上見捨てて置けませんから、今夜も一廻りする積りで、あの猿が池の側からそつと登つて行かうとしたんです。すると、怪しい人影が樹の影に見える。で、暫く身をすくめて舉動を覗つてゐると、ちつとも動かない様子なんですな……」

「ほほお……」

「で、怪しんで近寄つてみると、此奴がぶらりと下がつてゐるぢやありませんか……」

「へへえ、お職掌柄でも好い氣持ちやありますまい……」

「さうですとも、君、いかんもんだねえ……」

「全くいかんよ。然し、此奴は助かつたんで……」

さう云つた人達の話聲が、全くかう遠くからだんだん近寄つてくるやうに聞えて來たんですが、此處まで來た時、私はいきなり恐い夢から覺めたやうにどきつとしました。そして、思はずふつと息を吹いたんですが、まるで謎でも解くやうに、今までの自分の事がはつきりと胸を打つと、その「此奴は助かつたんで……」と云ふ詞が、ぐさりと何かで心臓を刺られたやうに體ぢゆうに響いたもんです。實際、私は今までに一度だつて、そんな恐ろしい人聲を聞いた事はございません。矢玉に追つ掛けられるんだつて、きつと及びもつかないでせう。で、いきなり逃げようとして體をはねつ返さうとしました。が、縛りつけたやうに身動きも出來ません。動けないから思はず身もがきしようとする、ひつつるやうに體ぢゆうが顛へ出して來たんです。

「や、動き出したよ君……」

「さうだね、氣が附いたと見える……」

「はは、運の好い奴だ……」

厭やに落ち著いてゐる人の話聲に、私は何だかかう頭の中が堪らなくぐらぐらして來ましてね。また、一もがきしました。

「おい、動いちやいかん……」と、それにおつ被せてまた外の聲がはつきり響きました。

が、もう我慢がなりません。體がやつと我れにかへつたやうな氣がしますので、風船でも破くやうに精一ぱい體を張つて、その體がおのづと顛へてゐるのを無理に抑へながら、我れ知らずわつと聲を立てました。

「殺して、殺して……」と、全く何ともかとも云へない恐ろしさに口から飛び出たこの詞が、自分の耳に響き返つて來た時、私はまるで我慢も恥も外聞も無いやうに泣聲を立てていきなり力任せに體を振ちつて、顔を敷かれた蒲團のなかへ埋めてしまつたんです。ほんとに、そんな場合に生命の助かると云ふことが、どんなに恐ろしいことか、それこそ當つ

てみなければとても味へる氣持ちやありません。

「何を云ふんだ、馬鹿つ馬鹿つ……」

「氣を確に持てつ……」と、そんな聲が耳元でがんと響いたかと思ふと、私はまたそのまま夢中になつてしまつたのでした。

……。

とに角、それから何分間、何時間経つたものか、二度目にはつきり氣が附いた時、私は家内やお袋や親方や大家さんや、近所の人達にぎしぎしと枕元を取り巻かれて、晝間の明りの差した自分の家に寝てゐたのでした。

「直吉、氣が附いたか……」と、親方の幅つひろい聲がしつかり聞えた時、私は初めて眼を明く事が出来たんです。

と、くすんだ天井がぼんやり見えました。それに續いて、さう云つて覗き込んだ親方の脂ぎつた、赤茶けた顔がぬつと眼に映りました。それが私が生き返つて初めて見た世の中

なんですね。何だかかうすべてが夢、さうです、どうしてもまだ夢の中で起つてゐる事のやうにしか思へません。が、確に手も動きます、足も動きます。息もする、匂ひもする、見えもする、聞えも——と思つた時、側でおいおい泣いてゐる家内の聲がはつきり聞えました。

「おい、直吉氣が附いたかい。だが一體まあ何てえ事をやつたんだ……」と、また親方は私の眼の眞上にちつと眼を重ねました。が、何を答へて好いか、詞なんか思ひ浮ぶ筈はありやあしません。ちつと重ね合つてゐる内に、じはじはと涙が眼に染んで來ました。

「助かつた助かつた……」と、その時です。體の何處からか、さう云つた聲がしつかりと湧いて來ました。でも、涙は止度なく出て來ます。が、今度ばかりは體の中に包みきれない嬉しさがポロポロと外へこぼれ出るのに違ひありません。そして、永い間それを抑へ兼ねてゐる内に、やつぱり劇しい事柄の後の氣の疲れ、身の疲れですね。何時の間にか、またあたりがとろとろと消えて、寢込んでしまひました。外の靜かな雨音を夢うつつに聞き

ながら……。

夕方、ふいとはつきり眼が覺めた時、もう枕元にゐるのは家内と、お袋と、俵ばかり、少しも今までの家の様子と變つてゐないので、何だか物足りない、うすら寂しい氣持がして來ましたが、昨夜の夢がまさまさと思ひ返されてくると、手を合せて拜みたいやうな思ひで一杯になりました。そして三人の顔をしみじみと見て、眼をつぶつて靜にお題目を稱へてゐました。

「みなさんから、こんなに澤山お見舞だよ……」と、暫くして、お袋が包紙や折箱を取り上げて私の眼先につきつけながら、にこにこ顔でかう云つたんです。

「どれ……」と、お題目を忘れて、思はず蒲團から手を出しかけましたが、自分の慾根性にひよいと氣が附くと、何だか氣恥しいやうな、情無いやうな氣持がしましてね。私は我知らず口元に浮んだ苦笑ひを噛み殺しながら、手を引つ込めてしまひました。そして眼を、つぶつて口の中でそつとまたお題目を稱へ始めました。が、内實ではやつぱり嬉しかつた

んでした。

「人間、全く何よりも慾だな……」と、その時しみじみ思ひましたよ。

「だがまあ直言、何だつてお前死ぬ氣になんぞなつたんだい……」と、その私を怪訝さうに見てゐたらしいお袋が、やがて耳元に口寄せてかう訊ねました。

ですが、私は何の返答も出來ませんでした。返答しようにも、自分にもその譯が分らなかつたんですからね。そして、また眼を明けて口をもごもごさせながら、ぢつと私を見詰めてゐるお袋の皺だらけの顔を暫くぼんやり見上げてゐましたが、する内に、出て來たのは、むしやうな嬉し涙です。お袋も私もそのままわつと泣き出してしまひました。

……

いいえ、死神ですよ。全くその時の私の體には死神がとつついてゐたに違ひありませんよ。さもなきやあ、たつた一つしか無い命、さうやたらに死ぬ氣になれるもんですか。考へると、我ながらぞつとしてしまひますよ。

話し終つて、直さんは眞實怖ろしいやうに體を顛はせながら、人の好ささうな、丸い眼をきよとんと見張つた。直さんはその頃もう十年餘りも私の家に出這入りしてゐた屑屋さんだつた。が、この話を聞いた時から一年も経たない昨年の十一月、離縁された娘の身に就いての苦勞から、直さんは石地藏を背負つて大川へ身を投げた。そして、僧侶、車引、屑屋と轉々した直さんは、その二度目の自殺で、とうとう四十六年の生涯の最後の幕を閉ぢた。

「直吉つあんはよつぽど死神に祟られてゐましたんですよ。」と、直さんのお得意先を廻る事になつたと云ふその朋輩の若い屑屋が勝手口でこんな事を云ひながら、下婢達と笑ひ合つてゐるのを或る時私はふと耳にした。

私は直さんの不幸な一生を思ひ浮べて、堪らなく暗い氣持にされてしまつた。

接吻

九年三月作

十一月なかばの、氣持好く晴れた或る午後のものである。S博士の妻の泰子は、尋常一年生の末娘のみち子が學校を引けてくるのを待ち兼ねて、一緒に日本橋通まで貞子の爲めの肩掛を買ひに出掛けた。

貞子は二番目の娘で、その三月程前に領事官補の河上と結婚して、直ぐに夫の赴任先の漢口へ旅立つてしまつた。もともと器量自慢の娘でもあつたし、それまでは何かにつけて相談相手にもなつてくれ、また自分に代つて家事向の爲事などこまごまと計らつてゐてくれたので、貞子を手元から喪つた事は泰子にとつてと角不自由勝な、堪らなく心寂しい事だつた。——何れはさうなる……と覺悟はしてゐたものの、時々、夕方などになると、自分の居間の次の間でピアノを弾いてゐたりした貞子の姿をしみじみ思ひ浮べて、泰子はふと涙ぐまれるやうな心持になつた。よく手紙を書いた、よく菓子や讀物などを送り届けた。そして、一つはその寂しさを紛らさうと、一つはもう自分の物でなくなつた娘の影を追はうとしてゐた。その貞子から前夜届いた手紙の中に『こちらもだんだんお寒くなりますから

お見立で肩掛を買つて送つて戴きたうございます……」と云ふ頼みがあつた。泰子はせめてもさうした頼みを受ける事がひどく嬉しかつた。そして、遠くに離れてもまださうして母としての心盡しを果せる事が、云ひやうもなく満足だつた。買物に急ぐ泰子の胸には幽かな興奮が小波を立ててゐた。

二三の洋品店を訪ねてびつたりした望みの品が得られると、泰子達はまた宇田川町で青山行の電車に乗り換へて、赤坂臺町の家へ歸りを急いだ。込み合つた電車の中に泰子は肩掛を納めた紙包を膝に載せて、晴れ晴れしい顔色を見せてゐた。その右脇には紺の大黒帽子に、緑がかつた羅紗外套を著た洋服姿のみち子が、靴下のするこけた兩足をやんちゃやらしく前に突き出して、泰子の肩にもたれるやうに腰掛けてゐた。電車の動搖につれて泥に汚れた靴先をぶらつかせながら……。

——似合ふわ、きつと好く似合ふわ……と、鼻條の通つた、きれの長い眼の澄んだ、下ぶくれの貞子の顔を遠く思ひ浮べながら、その白い襟首に黒天鵝絨地に薄桃色の花模様を

繡ひ出した肩掛がふつくりと巻かれる姿を想像して、泰子はふとかう口の中で呟いた。

と、その咄嗟に胸を衝いた譯も無い嬉しさが、自分ながら見立の巧い軽い得意さに混つて、急に氣持をわくわくさせて來た。泰子は何か知ら娘氣分にでも返つたやうな思ひに包まれて、そつと微笑した。そして、その眼の、中年のたるみの來た薄黄色い臉を二三度浮き浮きと瞬かせて、ちつと視線を紙包の上に落した。

——これを掛けて河上と居留地の外人公園へ散歩に行く……と、泰子は貞子の手紙の一節を頭の中に読み返しながら、白い包紙を透して見える天鵝絨地に眼を留めて、またそんな事を考へた。すると、すべてが幸福に行つて、今、新婚生活の楽しさに浸つてゐるに違ひない若夫婦の様子までが想像されて來た。泰子の胸には自分のその時代の古い夢が小鳥の羽根にでも觸られたやうに、すつと掠めて行つた。俯向いたまま泰子は思はず朗かな微笑を口元に湛へた。不幸な娘を持つた母の悩み——そんな物を彼女は知らなかつた。二人の子供の母になつた長女のさは子も、そして貞子も、またかよ子も、みち子も、すべてが

爲合せに行く、泰子は心の中が明るく、輝かしく、あらゆる母親の歡びが身の廻りを温く包んでゐるやうな氣がした。

——これが著いたら、どんなに喜んでくれるだらう……と、泰子は腰をすらせながら、ひよいと窓外を振り向いた。

秋の午後の静かな日差を受けた町並を、電車はけたたましい軌りを立てて走つてゐた。

泰子は埃に曇つた窓硝子を通して、すつかり葉を振ひ落した侘びしげな櫻並木の蔭に、またすがれ果てた秋の憂愁に包まれたやうな冷たい顔附で俯向き勝に小刻みに町を歩いて行く人影の中に、まだ頭に残つてゐる結婚式當日の貞子の華やかな顔を見詰めてでもゐるやうに、まるでさうした素漠たる風物に無關心なやうに、樂しげな視線をぼんやり外に注いでゐた。

「お母さん、來週の水曜、遠足ですつて……」と、ふと思ひ出したやうにみち子が詞を掛けた。

「まあ、さうかい……」と、泰子は心持をポツンと切られて弾かれたやうにみち子の顔を見詰めたが、それは氣の無い返事だつた。

「ねえお母さん、先生がさうおつしやつたのよ……」

「さう、何處へ行くの……」

「日比谷ですつて……」

「日比谷？ あんな近いところ……」と、泰子は興味なささうに聞き返した。心の中では——今夜ぢゆうに荷造りして……と、一日でも、一時間でも早く貞子の頼みを満足させてやりたいやうな思ひに心せかれながら……。

「ええ、さうよ。先生がさうおつしやつたわ……」と、みち子は眼を丸くして、甘えたやうな聲を弾ませた。泰子は膝の上の紙包をまさぐりながら、まだほとぼつた心持を追ひ續けてゐたが、その一心なみち子の顔附を見るとふと何となく可笑しくなつた。

「歩いて……」と、泰子は笑ひながら云つた。

「あら、歩けるわ……」と、みち子は小さな脰を尖がらして、子供らしい力み返つた聲で呟いた。泰子はまた上ずつた調子で笑つた。——あしたなさ早く小包で送り出す……と、考へ續けながら……。

電車が曲線を曲つて、眼の前に立ちふさがつた人達がなだれかかつたのでひよいと振り返ると、見慣れたM銀行のすすけた海老茶色の煉瓦壁がちらつと眼に映つた。

「あら、六本木よ……」と、泰子はよろけながらいきなり立ち上つて、みち子の肩をこづきながら云つた。「早く、降りるのよ……」

泰子は込み合つた車内に身をすくめながら、幾らかあわて氣味に車掌臺へ急いだ。乗換切符はまだ貰つてなかつた。泰子は龜の子のやうな人達の袂の陰から首を出したみち子を意識しながら、しきりに氣がせいた。

「乗換、一丁目……」と、泰子はせかついた聲で切符を渡しながらか車掌に云つた。

「下へ降りて下さい……」と、車掌は丸めた切符を變に落ち著き拂つた様子で切符箱に押

し込みながら、突つ慥貪な聲で叫んだ。泰子が車掌臺の下に廻つた時、其處には先に降りた三四人の男が向うに出かかつてゐる一丁目行の電車と切符を切る車掌の手とを、きよときよとした眼附で見交しながら立つてゐた。

「早くしろ、出ちまうちやないか……」と、一人の男が呶鳴つた。その聲を聞くと泰子もじりじりせずにはゐられなかつた。

「待つて下さい。物には順序があります……」と、若い、小生意氣らしい車掌はふて腐つたやうな聲で答へ返した。

男達は切符を受け取ると逸散に駈け出した。泰子もそれに續かうとして、ひよいと次に續いて走つて來た電車の影にためらつたが、隙を見ると、日和下駄を敷石の上にカタカタ響かせながら、向う側へ急ぎ足に渡り越えてしまつた。

が、渡り越えてほつと息づく暇もなかつた。殆ど本能的な或る強い力がぐつと泰子を背後に引きずつた。そして、さつと冷たい恐怖に身を引き締められて振り返つた時、泰子の

硬ばつた網膜に、次の電車の接近に線路を渡り兼ねて小兎のやうにすくんでゐるみち子の姿が、痛い程まさましく映つた。

「あぶない……」と、泰子は無意識に手を振り上げて叫んだ。

と、同時に、秋の西日に照し出された褪紅色の電車の、恐ろしく巨大に見えた胴腹がみち子の姿を向う側に遮つてしまつた。そして、鋼鐵の車輪の隙間から電車の後部へ廻つてチヨコチヨコ駈け出してくるみち子の足元がチラチラと見えた。泰子は石のやうになつた體を思はず背後へよろよろと崩して、ほつと吐息づいた。

が、兩眼を硝子玉のやうに大きく見開いて一心に自分を目掛けて走つてくるみち子の顔が車掌臺の陰からちらと見えた時、泰子は微笑んだ。そして、遠くから軽く手招ぎした。

が、その手を降す際もなかつた。突然、彼女の眼は右手の方から電車と平行線に走つて來た眞黒な自動車の影に劇しく脅かされた。みち子と自動車の距離は、その咄嗟に三間とは隔つてゐなかつた。泰子はみち子の洋服の三つ釦と、芋蟲の腹のやうなタイヤアの曲線が

ペタリとくつついた刹那に、

「あつ……」と、狂ふやうに喚き立てて、眼を兩手で覆つた。

「あぶないつ……」と、同時に近くで叫んだ人聲が泰子の鼓膜にはつきり響いた。

その聲に、反射的に兩手を拂つた時、まるで刺刀の薄刃のやうに尖がつた泰子の視覺に自動車のタイヤアの一尺程前に蛙のやうに這ひつくばつてゐるみち子のまつ青な顔が、きよとんと洞穴のやうに据わつた双の眼が、はつきりと映つた。みち子は動いてゐた、下敷にはなつてゐなかつた。泰子は紙包を投げ出して、裾を亂しながらみち子の體に駈け寄つた。

母の姿を見附けたみち子はす早く、むくりと起き上つて、互に駈け寄り様に泰子の膝元に倒れかかるやうに抱き著いた。そして、わつと泣き出した。泰子はみち子の頭を食るやうに帯に押し著けた。涙がひとり手に泰子の頬に流れ出た。泰子は二人を取り卷いた四五人の顔附を見分ける事も出来なかつた。暫く、喪心したやうに泰子は眼を伏せて佇んでゐ

た。

「いやもうてつきり——と思ひましたよ……」

「ほんとにヒヤリと來ました。だが運轉手さん、好く止めきりましたね……」

「は、いやなに、あんまりいきなりでしたもんで……」

「さうですとも、何しろだしぬけですからねえ。全く好いお手際だつた……」

「どつともお怪我はありませんでしたか。済みません、ほんとに……」

「運の好いお子さんだ。なに運轉手さん、あやまるセキはないよ……」

「さうとも。ですが奥さん、全くお爲合せでしたねえ……」

「ほんとにねえ……」

が、泰子は興奮した人達の、さうした上すつた聲を聞きながらも、詞を返す氣力は無かつた。ちつと眼を乾いた地面ぢまに落しながら、ただ反射的に、人事のやうに首をひよこひよこ下げ動かした。そして、手だけに力が籠つて、わなわな顫へて、みち子の頭を力強く自

分の體に抑へ著けてゐたのだつた。

自動車は走り去つた。人影も散つた。そして、次の電車を降りて來た人達が啜り泣いてゐるみち子を體に抑へ著けてゐる泰子のぼんやりした立姿を、怪訝けげんさうに見ながら通つた。泰子の眼からはまだ抑へきれない涙が、無意識に落ちてゐた。

「これをお落しになりましたよ……」と、さつきからの出來事を角の本屋の前で見つてゐる中學生らしい少年が、かう云つて紙包を渡した時、泰子にはつきり我に返つた。

「まあ恐れ入ります……」と、泰子はみち子の體を袖でかばひながら、少年に一拶して歩き出した。

「もう泣くんぢやない。人が笑ひますよ……」と、袖から半巾はんけんを取り出してみち子の顔を拭き拭きしながらも、泰子は強い感動の跡ひとしほ眼に染んでくる自分の涙を抑へる事は出來なかつた。

が、氣が附いて見ると、其處は何時もの見慣れた大通だつた。並び合つた商店も、街路

樹も、電信柱も、またくつきりと淡紅に澄んだ夕方の秋空も、少しも變つてはゐなかつた。いやそればかりではない、二人を見て笑つてくれる人すら無かつた。すべての事物は、たつた二三分前に泰子達の上に振りかかつた恐ろしい出来事に全く冷淡だつた、無關心だつた。それは啜り泣いてゐるみち子の姿にも、まだ劇しい感動に胸の動氣の鎮まらないでゐる泰子の心にも、まるで他事よそごとのやうな存在だつた。泰子はその恐ろしい出来事から何事もなく遁れ得た幸福感が歩いてゐる内にだんだん胸の中に擴がつて行くのを意識しながらもその周圍が何となく物足りなかつた。堪らなく寂しかつた。そして、あの瞬間に二人を取り巻いて「全くお爲合せでしたねえ……」と、感激したやうに云つてくれた人達も、その詞が要するに空虚うつろなものだつたやうにも、いや彼等がすべてをもう忘れてしまつて、何處かを平氣で歩いてゐるのではないかとさへも感じられて來た。と、其處あそこに新な涙が湧いて來た。

「みち子、好いかい。ほんとにこれからお氣を付けなさいよ、お氣を付けなさいよ……」

と、半分涙聲で泰子は繰り返した。繰り返しながらも、人口構はずみち子の總身を羽がひ締め抱き締めてやりたいやうな興奮が泰子の胸に込み上げてくるのだつた。

乗換場から一停留場ひととせしかない間を何時の間にか歩き過ぎて、或る横町を曲つて、自分の家の門構に眼を留めると、云ひやうのない幸福感に泰子の足取は早まつた。死骸になつてまた譬へそれでもなくとも劇しい怪我を受けて、みち子が運び込まれる——そんな想像がひよいと頭を横切つた時、泰子は門柱を仰ぎながら思はず踏み留まつた。が、みち子はすべての出来事が夢だつたやうにぼんやり泰子の背後うしろに立つてゐた。泣きじやくつた眼が赤く脹れてゐた。

——何でもなかつた、何でもなかつた……と、泰子は深い息を吸ひ込みながら呟いた。

と同時に、自分に受けた劇しい感動を思ふ様誰かに吐き出したいやうな衝動に押されて、

泰子は内玄関の格子戸を力任せに引き開けた。

女學校を引けて歸つてゐた三女のかよ子と女中のせきが、爲慣れたやうに急ぎ足に其處

へ迎ひに出た。

「お歸んなさい……」と、かよ子が云つた。

「お歸り遊ばせ……」と、せきが續けた。二人はにこやかな笑顔を見せた。が、泰子はその笑顔を何時ものやうに氣持よく受け入れる事は出来なかつた。たつた今、町を歩きながら感じて來たあの出來事に對するすべての事物の無關心が、二人の笑顔の中にも感じられた。

「まあ今、大變だつたのよ、もう少しでみち子が自動車に轢かれる處だつたのよ……」と踏石に下駄を脱ぎ捨てて泰子はきほひ立つた聲でいきなり叫んだ。ハラハラするやうな氣持で自動車の前輪の一尺程前に這ひつくばつたみち子の姿を、またまさまと頭の中に描き返しながら……。

「自動車に……」と、かよ子が叫び返した。

「まあ……」と、せきが同時に聲を立てた。

泰子の感動は、二人の聲を聞きつけると、二人の驚きに打たれた顔を眼に留めると、また一波揺れ返して高まつた。續いてあれもこれも詞を重ねようとした。が、唇は堅く硬ばつて動かなかつた。そして、家の中の空氣が水のやうに重く、息苦しく胸元に迫つた。そのまま泰子は茶の間の火鉢の前にベタリと崩れるやうに据わつた。抱へた紙包は脇から抜けて、ばさりと疊の上に落ちた。手足の顫へがまだ止まらなかつた。みち子は廊下の障子の前に氣拔けたやうに佇んでゐた。

「どうしたんだ、どうしたんだ……」と、聲を聞きつけた長男の潤一が二階から梯子段をどたどた云はせて駈け降りて來て叫んだ。

「あぶなかつたなう、あぶなかつたなう……」と、同時に隱居所から姑の松子がぼとぼとした足取で、茶の間に這入つて來た。

「轢かれそくなつたんですつて……」と、潤一は泰子のまつ青な顔を見詰めながら訊ねた。

「ええ、ええ、もう一尺の處だつたのよ。ほんとにあれで運轉手が巧くやらなかつたら……」

…まあ命が、命が縮まつたよ。ほんとに命が…」と、泰子はぐるりと自分を取り巻いた四人の顔を、小鼻を脹らましたながら、唇をひくひく痙攣させながら、見廻して云つた。息がひとり手にせいて、詞が齒搔いいやうにぼつぼつ途切れた。

「好かつたなう、みち子や……」

「それがねえお母さん、何しろ不意でしょ。みち子が電車の背後から駈けてくる、其處へ自動車がまっ正面に走つて来たんですもの、あつと云ふ暇も無かつたわ。でもね、でもね、もう一息の處で自動車がそりや巧く止まりましたのよ。前の車の輪が轉んだみち子を挟んだまんまね。何て運が好いか分りやあしない。もう一尺自動車が前に進んだら……」と、せきこんで話しながら、其處で泰子はぐんと鳩尾を突き上げられたやうな恐怖を感じて、詞を途切つた。

「みち子、こつちへお這入り……」と、潤一は云つた。「實際、あぶない奴だなあ、氣を附けなきや駄目だぜ……」

「ほんとに怖い、自動車は怖い……」と、松子がおろおろ聲で呟いた。

みち子は大黒帽子を被つたまま、疊の上にべちやんと坐つた。そして、その無表情な顔のまん中に、空を見詰めてゐるやうなとろんとした眼が据わつてゐた。泰子はそのみち子の顔を暫くしげしげと眺めてゐた。と、泰子の胸にはみち子が危難から、もう一步の危難から救ひ出された事に對する限りない嬉しさが新たな強い力で込み上げて来た。——助かつた。全く信じられない程偶然に助かつた。そして、其處にゐる、其處にぼんやり坐つてゐる……さう考へ続けながら、また泰子は我知らず何か云ひ出さずにはゐられないやうな心持に迫られて来た。

「ほんとにねえ潤さん、もう一尺の處だつたんだよ。其處で自動車が綺麗にピタリと止まつたんだよ。全くまあどう考へたつて嘘としきや思へやしない。たつた一尺手前がもの、運轉手が巧かつたんだね、好い運轉手だつたんだね。何てまあ見事に止めたんだらう……」と、泰子は眼をきよときよとさせて、誰ともなく前に並んでゐるみんなの顔を見廻しながら

ら滑かに調子づいた、高ぶつた聲で云ひ続けた。が、もう誰も詞を返さなかつた。調子を合せ兼ねた當惑氣なみんなの視線が泰子の口元に注がれてゐた。

「みち子、ほんとに氣を付けて頂戴よ。あんまりチョコマカするから好けないんだよ。怪我でもしたら、いいえ怪我どこぢやない、轢き殺されでもしたらどうする積りなの、氣を付けなきや好けません。學校へ行く時でもね。好いかい、分つたかい……」と、泰子の聲は肝高に響いた。

が、みち子はしやう事なしの視線を氣拙さうに泰子に注いで、西日の赤くかげりかけた障子の方に顔を反けてしまった。

「ああ怖かつた、怖かつた。まだ胸がどきどき鳴つてるわ……」と、泰子はちつと胸に手を當ててみて、獨り言のやうに呟いた。

冷淡な沈黙が続いた。

泰子は氣が附いた。無關心に自分に注がれてゐるみんなの眼にふと氣が附いた。そして

急に探りかけるやうな視線を松子、潤一、かよ子、みち子、せきとぐるりと投げ掛けた。と、その木彫り面のやうなみんなの顔に、自分があの時受けた衝撃が、そしてそれに續いて胸の中に巻き起つた感情の劇しい渦が、少しも傳はつてゐないやうな氣持がした。心の緊張が弛んだ、堪らない物足りなさが感じられた。泰子は思はず眼を伏せた。すると、自分が今までくどくど繰り返した詞のすべてが少しも自分の心の眞實を語り得なかつたやうにも、いや何時知らず眞實以上の如何にも諷らしい誇張さへ加へてしまつたやうな氣がした。泰子の胸にはふと感じた小さな氣拙さがだんだんに擴がつて行つた。と、同時に野原に取り残されたやうな寂しさをひしひしと感じた。そして、總身に張り切つてゐた感動は何時の間にか冷えてしまつてゐた。

暫く無言を續けてゐた泰子はひよいと立ち上つた。

「御飯の支度をしておくれ……」と、泰子は張りの抜けた聲を女中に残して、薄暗く夕闇の迫つた自分の居間に這入つた。そして、電氣も點けずによそ行き著をせかせかと脱ぎ出

した。暗い部屋の静けさの中に絹すれの音が暫く聞えてゐた。

明るい電氣の下にみんなが食卓を圍んだ時も、泰子の氣持は何となく重かつた。そして今更に夫の不在の事が——夫のS博士はその二日前から九州のY市へ官用で出張してゐたので——心寂しく、物足りなかつた。何時ものやうに食事も進まなかつた。絶えず、心の何處かをついばむやうな憂鬱が泰子の胸を支配してゐた。が、ふと傍に、ふだんの生き生きとした子供に返つたみち子が、晝間の出来事のすべてを忘れたやうに一心に箸を動かしてゐるのを見ると、——ああ好かつた……と思ふ嬉しさが、半時間程前までの新鮮さを、強さを喪つたにしても、時々泰子の胸に閃めくのであつた。が、もう泰子はその嬉しさを口に出して云ひたいとは思はなかつた。

静かな夜になつた。松子は隠居所の床に就いた。潤一とかよ子はそれぞれの居間の机に向つてゐた。そして臺所を片付ける女中の立居の物音が鎮まつた時、山の手の屋敷町の家の中は、秋の更けたう、そ、寒い夜氣に籠められてひつそりとなつた。泰子は居間の箆笥の前

に坐つて、さつきから貞子へ送る肩掛の荷造りに専心してゐた。傍の小さな寢床には何時か寢入つたらしいみち子の幽かな寢息が聞えてゐた。

——きつと好く似合ふわ。ほんとにどんなに喜んでくれるだらう……と、肩掛の包みを開いて、しげしげとその模様や色合や柄に見入つた時、泰子は重い氣持も憂鬱も急に忘れやうに晴れ晴れしく笑つて、かう呟いた。そして、また晝間の内に何度か頭を掠めた貞子の姿を懐しく思ひ描きながら、泰子は荷造りに我を忘れてゐた。肩掛の皺の寄らぬ折り方の心遣ひにも、油紙あぶらしを包む手先にも、絲を巻き著ける指の動きにも、宛名を認める筆の運びにも——母親の感情が甘く楽しみながらも、細かに働いて行くのであつた。

「やつと出来たわ……」と、荷造りを終つた時、泰子は満足らしくかう獨りごちた。そして、ほつと吐息づくと同時に口元に柔かな微笑を湛へた。手が、水々しさの消えた艶の無い、瘦せた手が、ちつと膝の上に戴せた紙包の油紙あぶらしの上を靜かに撫で廻つてゐた。それを手にする時の貞子の顔を思ひ浮べながら……。

そのまま泰子は暫く身動きもしなかつた。ぽつと明るく差した電氣の光が、女の誇りを喪つたやうな中年の青白い顔に陰影を投げて、片頬の小皺をまさまざしく浮かし出した。彼女は暫くうつつな視線を前に投げてゐた。と、ふと後毛の下がつた額に小さな小皺がヒクヒクと流れた。そして、何時かその顔には瞬間の満足らしい表情も、柔かな微笑も消えてしまつてゐた。新たな憂鬱の影がそのぼんやり空に注がれた視線の中に漂つた。荷造られた紙包は畳の上にばさりと滑り落ちた。

それは緊張の弛んだ次の瞬間の侘びしさだつた。やつぱり泰子には心盡しを果すまでの経過が楽しかつたのだつた。——頼みは濟んだ、もう望み通り送れる……と、さう思つた時、泰子はふと忘れ物でもして來たやうな空虚を胸に意識した。が、そればかりではないその送り物を手にした時の貞子、そしてその傍にひよいと河上の姿を並べてみた時、泰子の頭の中には新婚の甘さに酔つてゐる貞子の心の世界が、母の愛から夫の愛へと移つてしまつたに違ひない貞子の生活が、はつきりと思ひ描かれた。今までは少くともすべてが、

すべてが自分の物だと思つてゐた貞子が、——もうさうではなくなつた……と、泰子の心寂しい想像は其處まで動いた。それをもう疑ふ事の出来ない事實のやうに、まさまざと考へた。と、心寂しさは急に深く、そして、泰子の視野は曇つてしまつた。

——自分ではなかつた、自分ではなかつた……と、そんな思ひが不意に泰子の胸に一杯になつた。心盡しの喜びも冷えた。そして、幽かな嫉妬に似た感情が遠くの方から次第に心の上に覆ひ被さつてくるのを、泰子はどうする事も出来なかつた。暫く、その侘びしげな視線は膝下に轉げ落ちた紙包の上のままじまじと注がれてゐた。

が、その視線はふと弾かれたやうに動いた。其處には襖を背にして靜かに寝入つてゐるみち子の無心な寝顔があつた。

「まあ、好く寝てゐること……」と、泰子は瞬間の暗い空想を拭はれたやうに、我知らず呟いた。

むつちりした片頬、結ばれた赤い小さな唇、眼、鼻、耳、そして房々した髪の毛、それ

が柔かな電氣の光に照し出されて、メリンスの蒲團の襟裏から覗いてゐる。泰子の眼は急に輝いて吸ひ寄せられたやうに其處に留まつた。と、晝間の出来事のすべてがまた躍るやうに泰子の頭の中に蘇つた。あの太い、灰色のタイヤの前に小鼠のやうにすくんでしまつたみち子、それが安らかに眼の前に横はつてゐる。恐怖がさつと胸を掠めた。

が、救はれた、怪我也せず救はれたのだつた。而も、そのみち子だけはまだすべてが自分の物だつた。母としての愛を最後の一滴まで注ぎかけ得る我が子だつた。泰子は息を呑んで幽かな寢息を聴き澄ましながら、みち子の顔を長い間ちつと見据ゑてゐた。

次の刹那、物音も無く枕邊に近寄つた泰子の唇は、しなしなしたみち子の片頬の上に貪るやうに吸ひ寄せられた。そして、その眼には涙がしつとりと染んでゐた。

途 上

九年三月作

生暖かな四月の夜の、もう十二時近い頃だった。片岡と私とは名古屋驛のプラトホオムで西行の列車を待つてゐた。

「明日は雨だね……」と、青白いガスの灯が深い靄にぼやつと映つてゐる、静かな構内を見廻しながら、私は呟いた。暗い空には星影一つ見えなかつた。

「うむ、雨でも何でも好い。とに角、僕はもう眠くて眠くて堪らないよ……」と、片岡は腰掛にぐたりと身を投げ掛けて、眼鏡越しに細い眼をしばだたかせながら、けだるい聲で云つた。あたりには旅客の氣の抜けたやうな顔の十餘りが、鈍い電氣の光に死面のやうに照し出されてゐた。時々構内用機關車の喘ぎが幽かに聞えて來た。

學校の春休で、福井市の片岡の家を訪ねる旅の途中、私達は道を東京から中央線に取つて、甲府、上諏訪、木曾路と四日歩き廻つた。そのぶつ續けの道中の疲れが、時刻が時刻だけに名古屋へ著いた時には眠たさと一緒に私達を襲つて來た。で、乗り込んでも明方にはまた米原で北陸線に乗り換へねばならなかつたが、その目あての汽車で一寢入するのが、

私達にはせめてもの望だつた。

三十分程、もうとろけるやうな眠たさを堪へながら待つ内に、汽車は来た。片岡と私は急に勢附いて、へし合ふ昇降の人達を押し分けて後部から二輛目の短い三等車に乗り込んだ。が、中には殆ど空席も見附からなかつた。そして、むつと鼻を衝く不愉快な人いきれと、とろんとした弱い電燈の光の中に、重り合つた乗客がふしだらな姿で寝倒れてゐた。

「やあ満員々々……」

「ちえつ、弱つたな、坐る處も無いぢやないか……」と、片岡と私とは望を裏切られた苛立たしさと、いぎたない眼前の光景の不快感にむかむかして、そんな事を呟き合つた。が、漸く入口に近い座席の端に半分腰を降して、悄氣た顔で向ひ合つた。

「樂々と寝る積りだつたのに、ほんとにがっかりしたね……」と、片岡は膝の間に立てた蝙蝠傘の柄に腕を載せ掛けて吐き出すやうに云つた。

「爲方が無い、諦めるさ。あしたなさ向うの汽車でぐつすり寝りや好いよ……」と答へな

がら、私は煙草に火を點けて遮二無二吸ひ出した。頭の底が何處となくじいんと痛むやうな氣がした。

が、汽車が動き出して、一つ二つ暗い、寂しい停車場を過ぎたかと思ふ頃には、流星に寝苦しさと戦ひながらも私達は何時か寝込んでしまつてゐた。時々車體の動搖に痛む尻の、滑り落ちさうになるのに氣附いてはつと見開く眼に、ちらちら光る天井の電燈や、正體も無く寝込んだ片岡やあたりの乗客達の脂ぎつた顔が幽かに映つたが、それも瞬間の幻影のやうに消えて、私は寝苦しい眠の中に逆ひきれずにまた落ち込んでしまふのだつた。

幾つか、はつきり掴めない、薄氣味の悪い夢が、私の疲れた頭の中を走つて行つた。

……………

「わ、わ、わ……」と、いきなり耳の附根を叩き著けられたやうに、恐怖の叫びに似た、鋭い、譯の分らない人聲を感じて、私はぎよつと眼を開いた。と、眞面に、片岡のまん丸い双の眼がくるりと光つてゐた。その途端だつた。

「騙しくさつたな、畜生つ。己を、己を何處へ連れていぐだ……」と、車室の中程にすつ立ち上つた、四十餘りの、頭をくるくるにした、淺黒い顔の男が劇しく喚き立てた聲が、いきなりがんと耳を打つた。私は思はずちり毛を振つた。と、男は髪をばさばさにした中年の百姓女と、やつぱり中年の、木訥らしい、平たい顔の男とに左右から肩先を抑へ著けられて、凄氣を含んだ眼を空に注ぎながら身もがいてゐた。瘦せた両手には手錠が填まつてゐた。車内の視線は——眠つてゐる者は一人も無かつた——一齊に男の姿に集中されてゐた。

「歸せ、さあ家へ歸せ、馬鹿野郎め……」と、男は別に相手を見極めぬやうな様子で、また叫んだ。そして、體を振ち曲げながら、爛々と据わつた眼をきらりと私の方に振り向けた。瞬間に、眠たさも、頭の微痛も、苦酸っぱい舌の味も忘れてしまふやうな衝擊が、私の背筋を貫いた。

「どうしたんだ……」と、私は片岡の顔を刺すやうに覗き込んだ。

「氣違さ……」

「なに氣違……」と、私は息を呑みながら云ひ返した。そして、また狂人の後姿を見詰めた。

「氣を鎮めなされ、氣を鎮めなされ……」と、左から狂人を宥めてゐる女の、愚直らしい、日焼のした顔はまるで泣顔に見えた。

「さ、家へ歸せ、家や何處だ……」

「分つた、分つた。今、家さ行ぐだぞ……」と、狂人とそれを戦く手で抑へ著けてゐる中年の男とは、かう云ひ交しながら、まるで格闘してでもゐるやうに見えた。狂人のげつそり殺げた頬の凹みは電氣の光に濃い影を作つて、狭い額が枯葉のやうに青白かつた。

「馬鹿野郎め、己や氣違なんかぢやねぞ……」と、狂人は相變らず誰に云ふとも無く喚いた。その度到手錠がかちやかちや鳴つた。

「檀那方、お騒がせ申して相済みましねえだ。ちいつと氣が昂つてをりますんで、へえ……」